

結城勇太は勇者である

モンハン太郎ゆゆゆスキー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

結城友奈の兄、結城勇太（オリ主）が勇者になって頑張るお話し。ゆゆゆを一气見して書きたくなったから衝動的に書いた作品です。生暖かい目で見守ってください。

タグは順次追加していきます。

目次

第一話	結城勇太、養子になる	1
第二話	結城勇太の平和な日常。	5
第三話	結城勇太、親友の妹と出会う。	9
第四話	結城勇太、非日常と出会う。	14
第五話	結城勇太、勇者の少女たちと知り合う。	19
第六話	結城勇太、初の御役目後。	24
第七話	結城勇太、祝勝会に誘われる。	31
第八話	結城勇太は兄貴になる。	35
第九話	結城勇太、二度目の御役目。	42
第十話	結城勇太は合宿に行く。	46
第十一話	結城勇太の合宿初日。	50
第十二話	結城勇太の合宿二日目。	54
第十三話	不穏な気配	60
第十四話	終わる合宿、戻る日常。	66
第十五話	楽しい日曜と三度目の襲来	70
第十六話	にちじょう、わいわい	77
第十七話	結城勇太はおもちやである(?)	82
第十八話	夢と真実	86
第十九話	結城勇太はやらかした	91
第二十話	国を守る者達	95

第一話 結城勇太、養子になる

俺は夢を見ていた。地面が色とりどりの樹の根のようなものに覆われているよく分からない空間で、少女達が三体の化け物達と戦っている夢を。少女達三人の内、二人が重傷を負った。もう一人は、二人を化け物達から離れた所へ連れて行き、仲間であろう二人へ別れを告げた。そこからは、一人の少女が化け物達を倒そうと向かっていく。が、一人じゃ勝てない。みるみるその少女の身体はボロボロになっていく。見るに耐えない光景の筈なのに、俺は目を離せなかった。やがて、その少女は化け物達を倒した。しかし、それと同時にその少女は命を落とした。その瞬間、目が覚めた。

「……ッ！ ……随分とまあ嫌な夢を見たもんだ。それにしてもなんなんだあのリアルな夢は。朝っぱらから見るもんじゃねえだろ」

ぴちぴちの高校一年生の男の子には少し刺激が強過ぎないか。俺はそんなことを心の中でボヤキながらリビングへと向かうと、そこには前衛的ファッションと呼べる仮面をつけた人物が両親に向かって土下座をしていた。

「おはよう、父さん母さん。……これは、どういう状況？」

「勇太、おはよう。どうやら神樹様の御役目とやらにお前が選ばれたそうなんだ」

「ほー……」

俺は訳が分からず変な声が出た。決して俺は悪くないだろう。続け様に父は告げる。

「それで、お前を養子に出さないといけないらしい。その交渉で来たんだと」

「へー……って養子!?? 養子ってもっと小さい頃になるもんだろ……。この歳で養子はキツくね? 俺、絶対気遣うって」

「だよなあ……」

高校一年生にして唐突に養子になるという訳の分からないことを言われ、困惑と驚愕をあらわにする俺。するとオシヤレ仮面が、

「何卒、何卒宜しくお願い致します。あなた方の息子さんにしか出来

ないことなのです」

「ずっとこう言って聞かないんだ。勇太、どうする？」

「えっと、その御役目とやらはどういったものなんですか？」

「御役目については、話すことは出来ません。話してはいけないのです」

「えー、話せないのか……。それに俺にしか出来ないのかあ……。それならやるしかないよなあ……。だろ？ 父さん」

俺は御役目とやらを引き受けることを決めた。夢を見たことも関係しているかもしれないが、基本的に困ってるなら助けるだけだ。

「まあそうなるよなあ。母さんはどうだ？」

「勇太が決めたことなら止めないけど……。あの子が許してくれるかどうかよね」

「確かに、友奈は勇太にべったりだもんな」

俺には少し歳の離れた妹がいる。ちなみに妹は俺にべったりである。俗に言うブラコンというものだ。妹かわいい。しかし俺は心を鬼にし、両親に妹の兄離れを薦める。

「それもそうだな。よし勇太、気を付けて行ってこい」

「了解、友奈には話さなくて大丈夫？」

「私とお父さんがなんとかするわ。安心して行ってきなさい」

「おっけ。あの、いつから養子になるんですか？」

「出来るだけ早い方が助かります」

「分かりました。十分下さい」

「え？ 十分ですか？」

「アイツあんまり私物無いもんな」

「そんなレベルではないのでは……？」

◆◆◆十分後◆◆◆

「お待たせしましたー」

「リュックサック一つだけ……」

「んじや、行ってきますー！」

「おう、行ってこい！ あ、鍛錬は忘れんなよ！」

「当たり前！ また会う日を楽しみにしてなよー！」

「私達の息子をよろしくお願いします」

「は、はい。それでは」

「さ、行きましょう！」

◇◇◇

いきなり養子になるということに少し驚いていたものの、俺はなんだか楽しみにしていた。足取りが軽い。悪夢を見た日とは思えない程に。

「そういえば、養子になる家はどこなんですか？」

「大橋市の高嶋家という家に向かいます。貴方様はそこで、御役目に備え鍛錬をしていてください」

俺は高嶋家のことは分からなかったが、とりあえず返事をした。

「了解です」

◇◇◇

大橋市の高嶋家とやらに到着した俺が抱いた感想は、

「……デカっ」

という、チープここに極まれりな言葉だった。デカ過ぎる家を目の当たりにし、呆然としていた俺を横目にオシヤレ仮面はインターホンを鳴らし、

「お連れ致しました」

と、言った。すると扉が開き、インターホンから

「中へどうぞ」

という声が聞こえてきた。お邪魔しますと言って中に入ると、そこにはめちやくちや高そうな家具がいっぱいあった。え、俺ここに住むん？ 怖いんだけど。壊したらやばいだろ、絶対。そんな考えが脳を巡り、俺はガツガチに緊張してしまう。

「そんなに固くならないで」

「私達の息子になるのだからな」

優しい声でそうやってきたのは、めちやくちや美人な女の人とイケおじだった。あ、この二人が俺の新たなペアレンツなんですねー。顔面偏差値だけー。……あれ!?! オシヤンティー仮面どこ行った!?! 消えたんだが……

「立ってないで座って座って？」

「ア、ハイ。シツレイシマス」

「さて、自己紹介をしようか。私は高嶋家当主、高嶋裕也だ。よろしく頼む」

「次は私ね。私は高嶋優佳。よろしくね？」

「ハイ、ヨロシクオネガイシマス」

促されるままに高そうなソファに座り、目の前の二人の自己紹介を聞く。すると驚いたことに、俺は緊張でガツツチガツチになってしまった。目の前の二人はそんな俺を見て苦笑を浮かべる。

「やはり、まだ緊張してしまいか……」

「もつとこう、フランクにきてほしいのに……」

俺の新たなるペアレンツはしょぼんという擬音が聞こえそうなくらい落ち込んでいた。これは、俺がなんとかするしかない！

「俺は結城勇太。高校一年生。これからよろしく。父さん……母さん……」

「……！」「パアアア！」

一気に明るくなった！ 切り替え早っ!?？そして二人は俺に、

「ようこそ、高嶋家へ」

と言い、俺は結城勇太から高嶋勇太へと名前が変わった。その日の夜、俺は今まで食べたことのないような料理の数々を見て、緊張のあまり味をあまり感じなかったのは別のお話。味をあまり感じなかったというのにめちやくちや美味かったと感じたことは……どんな高級食材だったのだろうかと思ひ、俺は身震いした。

第二話 結城勇太の平和な日常。

俺が養子になってはや二年、こっちでの生活にやっと慣れてきた。新しい高校では、親友と呼べる奴も出来たしな。お、ウワサをすれば親友が来たな。

「よ、春信」

「よう、勇太」

親友の名前は三好春信。超がつくほど優秀な奴だ。だが、シスコンなのだ。ハイスペ残念イケメンというやつだ。

「なあ、聞いてくれよ勇太あ！ 夏凜ちゃんとあんま会話出来なくなつて来てるんだよ……これも偏にクソ両親のせいだ！ 夏凜ちゃんをもつと認めろー！」

「大変だな、三好スコン春信」

「三好とシスコンをくつつけるなよ！ つーかシスコンじゃねーし？」

「いや、それは無理あるだろ……ま、お前が認めてあげたら良いんじゃないの？」

「そうしたいんだけどさ、拒絶されそうで怖い」

「ビビリが」

「……クソツ、なんも言い返せねえ。あ、お前さ、今度ウチ来いよ」

「……は？」

「夏凜ちゃんにお前を紹介したくてな。あと、親父にお前の話しをしたら、今度連れて来いって言ってたからな」

「お前……何を話しやがった？」

「俺とタメを張れるくらいの天才がいるっていうくらい」

「はあ……んで、いつ行くんだよ」

「次の土曜？」

「ん、了解。んじやその日は空けとくわ」

「ありがとな。相棒」

「うどん三杯で手を打とう」

「肉ぶっかけな。OK」

「おう、正解」

チャイムの音が鳴る。朝のHRの時間の始まりだ。

「あ、もうこんな時間か。んじゃ、また来るわ」

「はいよ。後でな」

そう言つて自分の教室へと向かう春信の背を見て、俺も自分の席へ戻る。そしてHRが終わり、授業を受け、休み時間毎に来る春信と談笑していた。四限目が終わり、昼メシ時になった。

「勇太つて今日は弁当か？」

「いや、違うけど？」

「そうか。なら借りを少しずつ返済させてもらおう……」

クッククック……と悪い笑みを浮かべる春信を見て、楽しそうだなコイツと思ひ、二人で学食へ向かう。

「春信、お前は何食うんだ？」

「煮干しうどん一択」

「それ美味しいか？」

「美味しいぞ。それに煮干しは！」

「完全食、だろ？ 分かってんだよ」

「お前も煮干しの一部となるのだ」

「うわー、煮干し教教主にオソワレルー」

「棒読みが過ぎねえか……？ まあ良いや、ほら、並ぶぞ！」

「うーす」

◇◇◇

「いやー、食った食った」

「煮干しうどんは至高。はっきり分かる」

「出たな怪人煮干し仮面。正義の味方、勇者大盛り肉ぶっかけうどん大根おろしトッピングが成敗してくれる！」

「語呂悪ツ！ あと勇者の名前どうにかならなかつたのかよ……」

「お前が三好スコン春信だから仕方ないね」

「俺のせいかな!?？」

「あ、煮干シスコン春信か」

「俺の苗字が!?？」

そんな風にふざけていたら、もうすぐ授業が始まる時間になっていた。俺と春信はまた別れ、残った授業をこなして帰路についた。

「あー、疲れた。早く帰って風呂と飯を済ませて鍛錬と洒落込もう……」

「前から気になってたんだが、鍛錬って何やってるんだ？」

特に隠すようなものじゃないし、教えても良いか。あ、なんなら春信にもウチの武術を習わせるか？ 少し考え、言葉に出す。

「養子になる前に父親から教えてもらってた武術だよ。お前もやってみるか？」

「え、良いのか？ そういうのって、門外不出なんじゃないのか？」

「……しらね、っーか誰かに教えちゃダメなんて言われたことねーし？」

まあ当然、聞いたことも無いけどな。門外不出ならそれを教えなかった父さんが悪い。うん、俺は悪くない。QED！

「今度ウチ来いよ。そんな時に教えてやるよ。あと、今の父さん達にお前を紹介したいしな！」

「おう、今度誘ってくれよ。んじや勇太、またな！」

「お、そんじやあ春信、またな！」

別れの挨拶を告げ、俺と春信はそれぞれの家に向かい、歩き始めた。

◇◇◇

「……御役目、ねえ。結局のところ何をすりやあいんだろ」

この二年間ずっと考えてきた疑問をボソつと口にする。だが、誰もいないのだから答えが返ってくるわけがない。大赦から支給されたこのスマホも別に普通のスマホだしなあ。

「まあ、時が来りゃ分かるか。……よし！ 早く帰ろう！」

いくら考えても答えの出ない疑問を考える時間は無駄だなと判断した俺は思考を放棄して、高嶋家に向かい走り出した。

高嶋家に着いた俺は驚愕することになった。リビングにオシャンティー仮面が出没していたからだ。あの見た目だったら小さい子泣くんじやねえのかな。まあ、無視して部屋に行くなんてことは到底出来なそうなので、俺は意を決して仮面の人に話しかける。

「……御役目の件ですか？」

「流石です。高嶋勇太様、御役目の説明をさせていただきに参加しました」

「やっと話して頂けるんですか」

「そのことについては謝罪を、御役目の説明が遅くなつてしまい、大変申し訳ございませんでした」

「……お気になさらず。とりあえず、話して下さい」

「かしこまりました」

◇◇◇

大赦の仮面から話しを聞いた後、俺は自室のベッドに身を預けていた。

「……御役目って命懸けなんだな。だから鍛錬をしておけて仮面の女の人は言ってたのか」

大赦の仮面から聞いた話しをまとめると、俺はどうやら神樹様によつて【勇者】とやらに選ばれたらしい。そしてその勇者というのは、四国を守る壁の外から侵略してくる敵、【バーテックス】を倒すという使命を果たさなければならぬらしい。それが御役目の内容だった。勇者には、神樹様選ばれた者しか出来ないそうさ。中学生までは喜んでかもしれないが、もう俺は高校生だ。現実的に考えたら、

「正直言つて、ただの高校生には無理だろ……」

俺の小さなボヤキは、誰にも聞かれることなく、部屋の宵闇に吸い込まれていった。

第三話 結城勇太、親友の妹と出会う。

オシャレ仮面から御役目のことを聞いた俺は、何かが起きるんじゃないかと思つて身構えていた。が、そんなことはなく無事親友に変な目で見られて、週末を迎えた俺は今日、その親友たる春信の家にお邪魔している。

「いやー、お前の部屋大分片付いてるな」

「そうか？ 普通だろ」

男子高校生の部屋とは思えないくらい片付いた部屋で、俺は少し驚いた。しかし俺は知っている。俺の親友は、シスコンであるということ。奴のデスクマットの中には妹の写真が三枚入っている。だが、春信がそれしか写真を撮らないだろうか。否、断じて否だ。つまり、春信は妹の写真を隠しているだろう。そして、その写真がどこにあるのかも見当がついた。机の横にある引き出しが、一段だけめちやくちやに使い込まれた形跡がある。よつてそこにあるだろう。春信がそつぽを向いたその刹那、俺はその引き出しを開けた。

「」

俺は絶句した。え、純粹に怖いんだけど。何この引き出し、幼女の写真で埋め尽くされてるんだけど。引き出しの中身を見て、硬直する俺と、硬直した俺を見て硬直する春信。俺たちは何も起きてなかったことにした。うん、気にしたら負けだ。

「……俺、夏凜ちゃん連れてくるわ」

「お、おう。待つてるわ」

なんともいえない空気に耐えきれなくなった春信は、当初の目的である妹と俺を会わせるということを実行に移す。俺もこの空気をなんとかしたかった為、春信を送り出す。数分後、春信は小6くらいの、妹と同じくらいの歳であろう少女を連れて部屋へ戻ってきた。

「待たせたなあ！」

「元気良すぎかよ」

「……兄貴、この人が？」

「そう、いつも俺が話してる親友。勇太、自己紹介プリーズ」

警戒心バリバリじゃないですかヤダー。まあ兄貴の友達なんてそんなもんか。初対面だしな。しょうがないしょうがない。なら、わりとフランクにいくか。そう思った直後に、春信が俺に自己紹介をするように言う。

「おう、俺は高嶋勇太。君の兄貴の親友だ。よろしくな！」

「……三好夏凜」

割といい感じに自己紹介ができたと手応えを感じたが、春信の妹はまだ固い。もう少し距離を詰めるか。俺は一つ春信の妹へ質問をすることにした。

「んじや、夏凜ちゃんって呼んで良いか？」

「好きにして」

「了解、よし夏凜ちゃん。遊ぼうぜ！」

「何やるんだ？ 勇太」

「決まってんだろ？ 『大激闘アタックブラザーズ』やるぞ！」

◇◇◇一時間経過◇◇◇

全戦全勝、それが俺の結果だった。最近やってなかったとはいえ、ゲームなら負ける気がしねえ。そして俺は決め台詞を口にする。

「ふっ……またつまらぬものをぶっ飛ばしてしまった……」

「やっぱ勇太強くね？」

「……もう一回」

いつも俺にボコボコにされている春信が純粹な感想を漏らし、どうやら負けず嫌いらしい夏凜ちゃんが再戦を催促してくる。そこで俺は勝者の余裕をこれでもかと醸し出しながらこう言う。

「よし、かかってこい！ 何度でも返り討ちにしてやる！」

◇◇◇また一時間経過◇◇◇

「勇太に勝てねえ……」

「それどころか夏凜ちゃんにも勝ててないだろー」

「グサツ！ 勇太、いくら事実でも言っちゃいけないことはあるんだぜ……っ？」

「お、おう。なんか、すまん」

「その憐れみの目やめろオオオ……」

「……もう一回！」

「二人でかかってきたまえ。捻り潰してくれるわアア！」

「……兄貴！」

「やるぞ、夏凜ちゃん。勇太に目に物見せてやる！」

◇◇◇さらばに一時経過◇◇◇

「グハツ……ここまでか……」

「勝った……？ やったあ！ 勝ったよ！ お兄ちゃん！」

「よっしゃあ！ 勝ったあ！ 夏凜ちゃん、イエーイ！」

「イエーイ！」

「……／＼／＼」

夏凜ちゃんはハツとした顔をした後、なんだか恥ずかしそうにしていた。なんでだ。春信の呼び方か？ そんなことはいいやと思いなから、俺は話しかける。

「ちくせう、負けちまったかー。おめでどう、このアタブラランキング香川県第一位に良く勝てたな」

俺は言っただけでなかった俺の秘密の一つをサラッとカミングアウトする。すると春信は当然の疑問を口にした。

「……お前、最強なのかよ」

「まあな！」

「まあな！ じゃねえよ！ ちよつとは手加減しろや！」

「最初のうちはしてたぞ？」

「あ、そうなん？ なら……って良くねえわ！」

「でも実際、二人は学習するのが早いぞ。もう少しやり込めば、ランカーにはなれると思う」

「最強は言うことが違うねえ」

「うるせ。一対一でアタブラやるか？」

「ガクツ……」

「あ、春信が事切れた」

「兄貴……？」

事切れた春信をベッドに放り投げた俺は、春信から聞いていた夏凜ちゃんが抱えているコンプレックスを無くしてしまおうと、話しかけ

る。ちなみにこのタイミングで夏凜ちゃんと話すことは春信との計画通りだ。

「……なあ、夏凜ちゃん」

「何？」

「春信のことなんだけどさ、あいつは寂しがりなんだよ。だから、夏凜ちゃんが春信のことを見ててやってくれないかな？」

「兄貴のことを……？」

「そう、実は俺、これから忙しくなるかもしれないから、春信のことを頼んでもいいかな？」

「……うん、分かった。兄貴のことは任せて」

「おう、任せた！ んじゃ、春信を叩き起こして三人でうどんでも食いに行こうぜ！」

「うん！」

春信のことを夏凜ちゃんに頼んだ俺は、昼飯時だったこともあり、食事に夏凜ちゃんを誘った。

俺は三好兄妹の仲を取り持てたことを良かったと感じた。その理由は、夏凜ちゃんがようやく年相応の笑顔を見せてくれたからだ。これで兄妹仲が悪くなることはないだろう。春信が壁を作らない限り。

まあ春信に限ってそんなことはしないだろう。そう思いながら、俺は春信の腹部へと軽いチョップを繰り返していた。

「……ねえ、勇太さん」

「ん？ どうかした？」

「……夏凜って呼んでください」

「オツケー、分かったよ。夏凜。あと、俺に敬語は使わなくて良いからね」

「うん、分かった。勇太兄ちゃん」

親友の妹にちゃん付けじゃなく呼び捨てをしてくれと頼まれる俺、それを了承し俺に対して敬語を使う必要はないと伝えると、何故か兄貴認定された件について。春信が知ったら襲ってきそうだな。

案の定、夏凜が俺のことを兄ちゃんと呼ぶと、起きた春信が俺に襲い掛かってきた。無論、さつくりと撃退した。そして俺たちは、三人

でうどん屋へと足を運ぶ。

第四話 結城勇太、非日常と出会う。

春信の家へお邪魔した数日後、俺はおそらく御役目の何かであろう出来事に遭遇した。……それも授業中に。大学受験の年にこの仕打ちには酷くないか？ 心の中で悪態をつく俺。ま、それは置いて、初の御役目が今、始まろうとしている。

「えっと、確か、このアプリを開いて、変身すれば良いんだよな？」

俺はSNSアプリ【NARUKO】を立ち上げ、画面に表示された桜の樹が描かれた丸いボタンをタップし、祝詞を唱える。すると俺の周りに桜の花卉の竜巻が発生した。それに覆い尽くされ、何も見えなくなる。そして花卉がなくなって変身が終わった。俺の現在の姿は紺色の甚兵衛を着ている。おい、桜要素どこ行つた？ 見える範囲には無いんだが？ まあいいか、それにしても、

「俺、武器無し？」

俺には武器が無いようだった。どうやら素手で殴るか、下駄で蹴るかしかないらしい。正直言って信じられない。普通こういうのって武器あるでしょ。勇者だよ？ 勇者。この際剣とか贅沢は言わないよ。もう拳で戦うのは受け入れるよ。ならさ、ガントレットくらい支給してよ。流石の結城武術でも素手はきついよ。そんなことを考えていたら、どうやらお出ましのようだ。大橋の向こうからゆつくりとこちらへ向かって来る気持ち悪いフォームをした化け物はバーテックス。俺の敵である。よし、なんか水の玉みたいだから水玉バーテックスと名付けよう。

「……とりあえず大橋のところに行かないとな」

そう独り言を漏らした俺は、勇者システムとやらで途轍もなく引き上げられた身体能力をフルに活用し、水玉バーテックスへ飛んで行く。……どうやら本当に身体能力が引き上げられているようだ。左足で思い切り踏み切って飛んだ俺は、水玉バーテックスへと物理的に突撃していた。

「いや、能力上がりすぎだろおおお！ とりあえず食らえ！」

叫びながら突撃（物理）をした俺は水玉バーテックスへパンチを繰

り出す。ここで俺は気づいてしまった。あれ、俺の攻撃って流体の相手に効かなくね？ 水玉を殴った結果は、俺の腕が水玉の中に入っただけだった。ちなみに左腕で殴ったんですけど、抜けなくなりました☆。さて、どうするか。考えながらとりあえず殴り続ける俺。腕が抜けなくなる前に引くことを頑張りました。その直後、自身の身体とほとんど変わらないくらいの大きさをした双斧を持った少女が水玉を切る。

「浅い！ お兄さん！ 大丈夫!?？」

「おかげさまで！ 助かった、ありがとう！」

少女が水玉を切ったところから腕を抜くことに成功した俺は、少女と共に地面に降りた。俺は双斧の少女に感謝を伝える。水を殴っても意味ないし、どうするか……。

「くっそくそなんだよソレ！ 再生とかずるいだろ！」

「ミノさん逃げて！」

え、再生まですんの？ マジで俺何もできないじゃん。そんなことを考え悶えていると、水玉バーテックスがなかなかヤバそうな水のビームを放ってきた。狙いはもちろん双斧の少女。俺は双斧の少女の前に立ち、水のビームを蹴る。……相殺出来ちゃったぜ。後ろからきた二人の少女と双斧の少女に若干引かれている気がするが、この際キニシナイ。

「……身体能力上がりすぎじゃね？ 無傷なんだが？」

「大丈夫なの……?？」

「皮膚が痛え」

「大丈夫そうですね……」

引きながらも心配してくれる心優しい少女たち。え、めっちゃええ子らや。こんな子らを御役目を選ぶなんて、伐採したろうかな。そんな思考は赤い双斧の少女によって止められた。

「てか、お兄さんも勇者なの?？」

「ああ、そうだよ。ただ、まともな説明は受けてないから帰ったら大赦に説明責任を果たさせて言ってるよ」

「苦労してるんだ……ですね」

敬語慣れてなさそうだなー。そんなことを考えながら、至極真つ当な疑問に答える俺。マジ大赦無能。多分あの組織は上が腐ってるだけなんだよな。根っこが腐ってるからダメなんだよ。……上が腐ってるのに根つことはこれ如何に。俺は脳内で大爆笑をしていたが、白い弓を持つ少女の言葉で一気に現実へと戻ってきた。

「侵食が始まって……！ とにかく動きを止めなくちゃ！」

「弓の少女、お兄さんに任せときな。斧ガール、一緒に特攻しない？」

「え、でもお兄さん、攻撃効かないんじゃない？」

「相手水だから、外側からの打撃には強いだろうね。なら、内側から衝撃を与えて壊せばいいんだ。掌底なんかだと、衝撃を伝えやすいからね」

目に悪い樹海の色がじわじわと色を失い灰色になっていく。確かにこの現象は現実世界に影響が出るんだよな。それも、災害とか事故つて形で。趣味悪すぎでは？ そんな状況を目にした弓の少女の顔には、焦燥が見てとれた。あー、水相手に弓はキツイもんな。……よし、近接二人で攻めるのが効率いいかな。そう思い言葉を発する。すると、さっきの醜態を考えるとこれまた至極真つ当な疑問をバツが悪そうに斧の少女が告げる。そこは武器を持たない俺、昔の人が言い残したという『武器が無いなら、君が泣くまで、殴るのを、やめないっ！』という言葉を中心にめちやくちやにリフレインさせながら対抗策を述べる。

「なるほど〜！ 理解したんよ。すみすけ、ミノさんとこの人がバーテックスに向かって行ったら、私たちは援護に回るよ〜」

「え、ええ。わかったわ」

「そんじゃ、さっくりと終わらせますか！」

「そうだね。行こうか、斧ガール」

金髪の少女は頭が良いのだろう。咄嗟の判断力が高いタイプだ。少女たちのチームだったらリーダーとなるべき存在だと思う。そしてこのタイプは、いざという時に頼りになるタイプだ。俺の言いたいことを一瞬で理解し、弓の少女に伝えてくれる。ありがてえ。そこで思考を打ち切り、斧の少女にそろそろ突撃をするかと伝える。

「あ、あたし三ノ輪銀っていいいます」

「私は乃木園子っていうんよ」

「私は鷺尾須美です」

「OK、銀ちゃんに園子ちゃんに須美ちゃんね。あ、俺は高嶋勇太。よろしく！ よし、それじゃあ銀ちゃん、行くぞ！」

「はい！」

俺たちは水玉に向かって走り、跳ぶ。その刹那、水玉バーテックスから射出された二つの水の塊が俺と銀ちゃんの頭を包み込んだ。無論、呼吸は出来なくなる。しかもこの水の塊、厄介なことに弾力がありやがる。とりあえず殴ってみようかと思ったが、そんな考えは頭を包む水を飲み干すという銀ちゃんの行動でどっかに吹っ飛んでいった。まあ、そんなのを見せられたら、俺もやるしかないだろお！ と、
「まじゆい……」

「まっつっつっつっつ」

「お味は？」

「最初ソーダで途中からウーロン茶……」

「俺はその後にメロンソーダと、スポドリと、コーヒーを混ぜたようなのが口いっぱい広がってきたよ……」

バーテックス印のお水を飲んだ俺と銀ちゃんは、同じ感想を抱いた。あれ、俺の味わたったのだいぶ酷くない？ 味の想像が出来てしまったのか、三人の少女は顔を顰めたあと、俺を優しい目で見つめてきた。それにしても美少女だなあ。てか男の勇者はおらんの？ 神樹様ロリコン疑惑ができたなあ。

「ちきしよーめ、せめて普通の天然水の味であれよ。マジでしばく」

「怒るとこそこなんだ……」

「よし、銀ちゃん。俺についてきて。俺がまず突っ込む、その後銀ちゃんも来る、そして二人で攻める。これが理想的な動き。その時に二人には援護を頼みたい。須美ちゃんは水玉に矢を当ててくれ。園子ちゃんは基本的には須美ちゃんの護衛を、そしてもし銀ちゃんが吹き飛ばされた時のリカバリーを頼む」

「わかりました」

「分かったんよ〜」

「了解です!」

「うし、それじゃ行くぞ〜!」

「はい!」

「は〜い!」

俺と銀ちゃんがバーテックスに向かって跳躍する。それを阻止しようとしてバーテックスは水の玉を撃ってくる。が、須美ちゃんがほとんど撃ち落とす。偶に撃ち漏らしたものは俺が殴って消す。バーテックスも不味いと思ったのか、さっきの水ビームを撃ってくる。現在俺たちは空中にいる。つまりさっきの蹴りでの相殺は出来ない。申し訳なく思いつつ、俺は銀ちゃんの腕を掴み、ビームより上にバーテックスに向けて投げる。驚いた顔をこちらに向ける銀ちゃんに俺は笑みを浮かべ、銀ちゃんを投げた反動を利用して、水ビームに蹴りを当てて相殺する。

「お兄さん!?!」

「銀ちゃん! やれ!」

勢いを失い、落ちていく俺を心配する銀ちゃん。その目には俺を助けるべきかバーテックスを倒すべきかという迷いが浮かんでいた。だけどこれが最大のチャンスだ。だから俺は銀ちゃんに向かって叫ぶ。彼女は目を閉じ、そして開眼した。その目に迷いはなく、バーテックスを容赦なく切り刻んでいった。

第五話 結城勇太、勇者の少女たちと知り合う。

銀ちゃんがバーテックスを切り刻み、鎮華の儀が始まる。もう着地は諦めているため、綺麗だなーなどと思いながら落ちる。これからの課題は空中機動だな。よし、空を飛べるようになろう。うん、そういう。

「ぐえっ……………」

「撃退……………」

「出来たってこと……………」

「やったー!!」

果てしなくダサイ断末魔を上げ頭から落ちる俺と、バーテックスを撃退できたことにはしゃぐ銀ちゃんと園子ちゃん。そして撃退したことで樹海化が解除され、俺はいつの間にか大橋付近の祠の前にいた。さっきまで一緒に戦っていた少女たちと一緒に。

「…………あの、大丈夫ですか?」

「…………あーうん、大丈夫」

須美ちゃんの心配が心にグサリと刺さる。大丈夫ではある。ただ、バカ恥ずいだけだ。今度からは気をつけよう。大橋を見ながら俺はそう決心する。…………頭から落ちたのに怪我一つないとは、俺は一体? まあいいや。

「…………そっかる。学校に戻る訳じゃないんだ」

「ん、うお、あつ! やつべ! 上履きだ!」

「ほんとだ〜!」

「あー、上履きか…………懐かしいな。履き替えのない高校で良かった……………」

「えー! いいなあ、高校生」

学校にいる時間だったからだろう、三人は上履きのままだった。かという俺はランニングシューズを履いている。やつぱり履き替えが無いと楽だな。そう少し自慢をすると、銀ちゃんがズルいと言わんばかりに言葉を漏らす。そこで俺はすかさず、高校生の素晴らしさを存分に伝えることにした。

「高校生はいいぞー。なんてったって買い食い自由！ 帰り道に寄り道しても怒られない！」

「おおーっ！」

羨ましがるのが一人増えたと同時に、注意をしてくる真面目ちゃんが出て来た。

「良くないですよ！ 買い食いだなんて！ お行儀が悪いです！」

「立ち止まって食べるのでセーフ！」

「そういうことじゃ……」

ノリと勢いとファイリングで注意を乗り切った俺は話しを逸らすべく小学生三人衆に質問をする。

「あ、そういえばさ、君たちは授業大丈夫なの？」

「私たちはまだ朝の学活だったので」

「それに、もうクラスのみんなは知ってるんで」

「先生が話してくれたよ」

「……マジ？」

「……まさか」

「……大赦め！ クレーム入れてやる！」

大赦はきつとMU☆NO☆Uだね。俺の長年の感（十八年もの）がそう告げている。くそが。そう心の中で悪態をついていると、須美ちゃんが提案をしてきた。

「……あの、改めて自己紹介をしませんか？」

「あー、そうだね。さっきは簡単に済ませちゃったしな。……よし、誰から言う？」

「なら最初はアタシ！ 三ノ輪銀です！ 好きなものはうどんとイネスと醤油豆シエラート！ よろしくお願いします！」

「次は私ね。私は乃木園子、好きなものはうどんかな。よろしくね」

「鷲尾須美といいます。好きなものは……うどんとぼた餅です。共に御役目を全うしましょう」

「俺の番だな。俺は高嶋勇太、好きなものはうどんとゲーム、それから運動だな。これからよろしくな！ あと、俺には敬語は使わなくてい

いぞ。そうだなあ、兄貴か友達とでも思ってくれ」

「りよーかい！ にーちゃん！」

「分かったんよく。おにくちゃん」

すぐに兄として慕ってくれる銀ちゃんと園子ちゃんはかわいかったです。まる。

「順応するのが早いわね……」

「いやー、アタシって姉弟の中で一番上だからさ。にーちゃんが欲しかったんだよね」

「私は一人っ子だからおにくちゃんか弟が欲しかったんよく」

「どうも、兄です」

「ほら、鷺尾さんも」

「お……おに……勇太さん！」

「まだ早かったみたいだね〜」

照れている須美ちゃんもかわいかったです。まる。

「あ、そうだ！ NARUKOでグループ作ろうよ！」

「連絡先の交換か。盲点だったな。えーつと……はい、俺のアカウン ト」

グループへの参加はスムーズに終わり、雑談に花を咲かせていると、一台の黒い車が現れた。その車から降りてきたのは、恐らく多分きつとmaybe、俺をこっちに連れてきたオシヤレ仮面だった。神官服じゃないから分かりにくいけど、背格好が同じだからそうだと思う。

「鷺尾さん、乃木さん、三ノ輪さん、御役目ご苦労様。そして高嶋勇太様、御役目ご苦労様です」

「あ、普通に話して下さい。今日は神官として来た訳じゃないでしょう？」

「……なら、そうさせてもらいます。とりあえず、鷺尾さん達を学校へ送った後、貴方の学校まで送ります」

「あ、俺は大丈夫です。……あのー、一つ聞きたいんですけど良いですか？」

「？ ええ、大丈夫です」

「俺が授業中に居なくなった理由は、学校が把握しているのかどうかを教えてください」

「そのことについては話してあります」
「よしっ！」

大赦はY U ☆ U ☆ N O ☆ U だったよ。良かったアアア！ 御役目のせいで説教とかマジ勘弁だからな。クレームはやめてしんぜよう。

「良かったね！ にーちゃん！」

「にーちゃん、とは？」

眼鏡美人の顔が険しくなり、スマホをすつと取り出す。そして電話アプリを開き……

「ちよちよちよ、何をナチュラルに通報しようとしてんすか！」

「小学生に兄呼びをさせる高校三年生男子……」

「言葉だけ聞くとやばいっすね……。いや、純粹にそういう立ち位置の方がいいかって思ったからです！ やましい気持ちは1ヨクトたりともありません！」

「大丈夫です。分かっています。勇者に選ばれた貴方のことは大赦が調べてありますので」

俺は無意識のうちに妹を欲していた……。!? いやいやいやいや、まさかまさか、俺、シスコン疑惑、浮上。……考えないようにしよう。妹が好きで何が悪い！

「あ、そうなんです。焦りましたよ。たちの悪い冗談はやめてください……」

つーか身辺調査してあるなら通報しようとしなくて良かったんじゃないっすかねえ……。
確実に俺、試されたよな、今。まあいいか。

「ええ、そうですね。それじゃあ、鷲尾さん、乃木さん、三ノ輪さん。乗ってください」

「はい。勇太さん、それでは」

「はくい。バイバイ、おにくちゃん」

「ハイ！ にーちゃん、またね！」

「おう、またなー！」

「失礼します」

四人が出発したのを見送り、俺も歩き出し、立ち止まる。

「……めんどいからサボろうかなあ。いや、ダメだ。鞆がまず学校にあるし、なんならその中に財布もあるな。……よし、行くか！」

サボろうかなという考えは、財布がないから特に何もできないことに気づいたことと、今年受験を控えているから少しでも評価を上げようという考えによって綺麗さっぱり消え去り、俺は学校へ向かって走り出した。

第六話 結城勇太、初の御役日後。

須美ちゃん達三人と別れた後、学校へ向かい走った俺は学校に着き教室の前で立ち止まった。ゴリゴリに授業中の教室へ突撃するのは思いの外緊張するもんだなあ。

「失礼しまーす……」

意を決して教室に入ると、扉のガラリという音が鳴ると同時にクラスメイトがこちらを見てきた。クラスメイトの視線が刺さる。当然担任の視線も刺さる。視線を気にしないようにし、俺は自分の席に歩いて行く。そして席に着いたとき教室内の全員が一言、

「せーの、御役目、ご苦労様！」

「……ふお？」

俺の口から出た声は、自分が今まで出したことのないような情けない声だった。殆ど話したことのないクラスメイト達がこんなに暖かい声をかけてくれるとは思わなかった。

その後、その授業は俺への質問会兼親睦会のようなになった。隣のクラスで授業をしていた教師からうるさいと苦情が来たが、その教師も俺を見るとクラスの人達を呼び、質問会兼親睦会の参加者が増えた。そんなことが何回か繰り返されるうちに、ウチの高校の三年生が全員集合していた。廊下に。

それから数分後、どうやら俺は人気が高かったらしい。御役目選ばれたという珍しさや、部活の手伝いとかをしてきたからだろうか。そういえば中学校に俺の立ち上げた部活は残っているのだろうか。……ないだろうな。ボランティア活動をしたり、他の部活動の手伝いをするだけの部活だからな。え、部員？ 俺だけですけど？

それはさておき
閑話休題。まさか全校生徒プラス教師陣全員が体育館に集められるとは思わなかった。ちなみに俺は体育館のステージに立たされ、めっちゃ質問された。そして質問が落ち着いたとき、校長がステージに上がり、「この日を、我が校の御役目記念日とし、休みとする」と言った。そして、全校レク大会が唐突に開催された。クラス対抗ドッチボールでは、決勝は俺のクラスと春信のクラスで争った。最後まで

残っていたのは俺と春信だった。だがそこは俺、勇者としての力を見せ、春信を倒し、クラスを優勝へと導いた。その後、空手部、柔道部、剣道部などの武道系部活の主将達と手合せをした。もちろん勝った。結城武術はオールマイティーですごいんだなと思った。

そんなこんなで楽しい時は流れ、俺は全校生徒の憧れとなつたらしい。模範として頑張れと校長に言われ、頑張ります！ と答えると、盛大に拍手が起きた。そしてレク大会も午前中で終了したため解散し、その場に残ったのは俺と春信の二人だった。

「……高校つてこんな感じで良いのか？」

「何を呟いてんだ？ それにしても、いつも通り超人だな、お前は」
「……言うな、人間卒業疑惑が俺の中で急上昇してるんだ。つーかお前も大概だろ」

人間は卒業したくないんだがなあ。いや、御役目をやるんだから卒業しといた方が良いのか？ ……気にしたら負けかな！ よし、俺はもうキニシナイ。

てか最近春信も俺と一緒に稽古をしているから春信も卒業しかけではあるんだよ。つまり、お前も超人になるんだよ！

「いやー、勇太さんには敵わないっすわー」

「そりやそうだ。稽古してる期間が違うからな。つーかこれで負けたらメンタル保たんわ」

「まあ、それはその通りだな。……なあ、御役目って何をやるんだ？」
「だから言えないって言ってんだろー」

春信が真剣な顔になつて聞いてくる。とりあえず御役目については大赦から話すなつて言われてるし、親友でも教えるわけにはいかん。なんなら知らない方が絶対に良い。そう思い、断る。

「ちえっ、俺には教えてくれても良いじゃねえかよ」

「ダメなもんはダメだ」

「大赦に聞いてみるか」

「絶対に無駄だと思うぞ。教えてくれるわけがない」

「そこまで!?! 大赦に就職しようかなあ」

「悪いことは言わん。やめとけ」

さつきまでの真剣さのなくなった表情でわざとらしい下手な舌打ちを披露しながらまだ聞いてくる春信。やっぱり断る俺。大赦に聞くって、その大赦が秘匿してるんですかー？

御役目の内容を知るためだけに大赦に就職しようかなとか言い出す春信を、俺は真顔で止める。大赦ってなんかきな臭いんだよな。いや、これマジで。

「そうか、それは残念。んじゃそろそろ帰るか？」

「そうだな。……あ、イネスのゲーセンでも行かね？」

「たまにはアリだな」

「よし、決定だな。んじゃ、行こうぜ！」

「ああ、そうだなー！」

御役目の話しが終わり、内心安堵する俺に向かい、春信は帰るかどうかを聞く。ただ帰るのはつまらないからゲーセンで遊ぼうと提案する俺。快諾する春信。

そして俺達は駄弁りながらイネスのゲーセンに向かった。

◇◇◇

ガンッ！ ガンッ！

軽い物が強く打ちつけられる音が鳴り響く。

「やるじゃねーか、春信……ッ！」

「お褒めに預かり光栄だ……なッ！」

激しめのラリーが白熱する。そして春信がパックを止める。俺と春信はそれぞれが温まったことを確認し、互いに本気を出すと宣言する。

「そんじゃあそろそろ」

「ここからは」

「本気でいこうか」

先程よりも音が大きくなり、音の鳴る感覚も短くなる。ギヤラリーが俺と春信を囲む。いつしか大勢のギヤラリーが集まり俺達のバトルを見ていた。

「そらッ！」

「ぐっ……！」

春信の集中が切れてきた。さつきまでより動きが悪い。対する俺はまだまだ余裕。何が言いたいかというと、チャンスということだ。

「そこだつー！」

「マジか!?？」

一瞬の間についてパツクをゴールへ叩き込む。それと同時に、ゲーム終了のホイッスルの音が鳴り響く。一瞬の静寂が訪れ、ギャラリー達は瞬く間に沸き上がり、口々に労いの言葉を言ってきた。そしてギャラリー達は、自分達のやっていたゲームに戻って行った。

「くつ……、負けた……！」

「集中力が足りんなあ。動きは良いけどな」

「それは課題だなー。それにしてもお前に武術教えてもらってから、日に日に人間卒業に近づいてる気がするんだよな」

「人間卒業って言うな。でもそこまで来たか。割と早い方か？」

「どういうことだよ」

「稽古の強度、ワンランクアップってことだ」

「……お手柔らかに頼むわ」

「そりや無理だ。諦めろ」

「うわアアアアアアアアアアアアアア！」

稽古がキツくなることを嘆く親友。稽古の強度を上げるのにお手柔らかにするのは無理に決まってるだろうに。

◇◇◇

そんなこんなで時は過ぎ、お昼時となった。フードコートに着き、俺は明太釜玉うどんを、春信は煮干しうどんを頼んだ。

「あー、水うめえ」

「それな」

白熱したエアホッケーバトルの後に身体に残る心地良い熱を、キンキンに冷えた水を身体に流し込むことで急速に冷やす。風呂上がりに冷たい水を飲むのと同じような感じだ。水うめえ。

「そういうばお前、ずっとあのアスレチックで鍛えてたのか？」

「ああ、だってあそこ山じゃん」

「だから高低差がキツいんだけどなあ！」

「舗装されたそこらの道よりもロードワークに向いてるだろう？」

「遠くないか？」

「鍛えられるから良いじゃん」

「なんでそんなに鍛えてんだよ……」

「強くなつといて損はないからな」

「……まあ、分からんことはないけどさ」

稽古場所について文句を言う春信。強くなるにはかなり適した場所なんだがなあ……。まあ、遠いけどな。

そこで呼び出しベルがそこそこの音量で鳴る。

「取りに行こうぜ」

「りよーかい」

フードコートのおうどん屋からうどんを受け取り、席に戻って座るとすぐに食べ始める。もちろんいただきますは忘れない。うどんうめえ。

「そういうば、最近夏凜ちゃんとはどうなん？」

「仲良しこよしでやれてるよ。……まあ、その、なんだ。ありがとな」

「……どういたしまして」

唐突に頭に浮かんだ疑問を春信に聞く。帰って来た答えはめっちゃくちやに良い答えだった。そして春信に感謝を伝えられ、少し照れる。その直後、煮干シスコン春信がひよつこりと顔を出した。

「なあ、勇太。お前も妹を持つ者だろ？ 存分に語り合おうじゃないか。写真見せろー！」

「写真？」

「そう、写真だ！」

「財布財布と……ホレ、妹の写真」

「おー、可愛いな！」

「だろ？ そのうえ優しいぞ。名前は結城友奈っていうんだ。夏凜と
同い年だぞ」

「へえー、じゃあどつかで会うかもしれないな」

「讚州市に来れば会えると思うぞ」

「讚州市か、割と遠いなあ」

俺はそう言って押し花を取り出す。すると春信は感心したように言う。

「すごい綺麗だな。手先器用なのか」

「まあな。あ、一枚いるか？」

「え、もらって良いのか？」

当たり前だろ。渡したくない奴には言わんし、親友だしな。

「春信君、君には八重桜の押し花を贈呈しよう」

「ありがたく頂戴するわ。お前が持つてるやつ八重桜しかないけどな」

「八重桜って綺麗じゃん？」

「それは分かるわ」

押し花を贈呈した後、少し話しをしていると春信の携帯が震える。

「ん？ お前携帯鳴ってね？」

「え、マジだ。親父から電話だ。もしもし？ え？ ……ん、分かった。それじゃ。悪い、今日は帰るわ」

「ありや、残念。んじゃ、気をつけて帰れよ。俺はゲーセンのランキングをとりあえず一位になっとくから」

「本当にやりそうだからなんともいえないな……。んじゃ、また明日！」

「おう、また明日」

俺は春信に別れを告げ、一人になった。

「さて、何をしようか」

ここはイネスのゲーセンだ。広く、沢山の種類のゲームがある。なら、やることは一つしかないだろう。

「全制覇といきますか」

そして俺は一つ一つランキングの一位を奪っていった。

第七話 結城勇太、祝勝会に誘われる。

春信と別れ数時間、全ての筐体のランキングで一位を獲得した俺はフードコートで、ソワソワしていた。その理由は、御役目を共に行う三人の少女に祝勝会に誘われたからだ。

事の発端はゲーセンで一位を取りまくっている最中に、NARUKOに来たメツセージだった。そのメツセージは、御役目を無事に遂行出来たことを記念して、祝勝会を開かないかというものだった。もちろん俺は快諾し、待ち合わせに遅れないよう、とっととランキング一位を独占する作業に入った。それから数十分後、クレイニングゲームでデカイぬいぐるみやプラモデルなどを乱獲し、今に至る。

「……いつも通り取りすぎたなあ」

考え無しに乱獲した訳ではない、断じて。

「あっ！ 勇太さ、ん……。なんすか、それ……。？」

困惑した声を上げる銀ちゃん。そらそうなるよな。フードコートのテーブルが、上も下も埋まってるんだから。ここで俺、妙案を思いつく。

「取っちゃった☆」

「めっちゃ取ってますね……」

「して、どれが欲しい？」

「え、良いんすか!?!?」

「全然良いよ」

「ありがとうございます！ それじゃあ、うーん……。これで！」

そう言っただけで銀ちゃんが選んだのは、御免ライダーのフィギュアだった。俺はここで更なる妙案を思いつく。

「これね？ おっけー」

俺はそう言っただけでビニール袋を取り出し、銀ちゃんが選んだフィギュアを袋に入れ、更に二つの御免ライダーフィギュアを袋にぶち込む。

「ちよ、勇太さん!?!? 悪いですってー！」

「良いの良いの、飾る場所無いし」

「なんで取ったんですか……。でも、ありがとうございます！」

銀ちゃんを困惑させたものの、無事に荷物の軽量化に成功。うおつ、良い笑顔だ。ありがとう銀ちゃん。さらばだ御免ライダー三人衆。これで少しは軽くなったよ。だが、そんな素振りは見せない。ただの気のいい兄貴になる！

「どういたしました。二人もいる?」

「そんな、いただく訳には……!」

「えく、いいの?」

「良いんだぜ☆」

「乃木さん!」

銀ちゃんにプレゼントをし、園子ちゃんと須美ちゃんにもプレゼントをしようとする。園子ちゃんは受け取ってくれそうだな。でも、須美ちゃんは断ろうとしている。園子ちゃんを注意してるしな。

……ただ、今回乱獲した理由は三人と仲良くなるためだ。特に須美ちゃんとかだ。必要のない懸念かもしれないが、須美ちゃんはどうも人を信頼するのが苦手らしい。戦いの最中に、自分がなんとかしないとでも思ってしまったのだろう。今回は無事に終わったものの、この考えを改めないと須美ちゃん自身だけじゃなく、銀ちゃんと園子ちゃんの身をも危険に晒すだろう。

俺が仲良くなることで、人を信頼できるようになるきつかけになればと思つて乱獲したんだ。古今東西、仲良くなるにはプレゼントを使うのは良い手だからな。ま、お節介かもしれないけどな。

だからこそ、受け取ってもらわなければ。俺は須美ちゃんを宥めつつ、どれが欲しいのかをさりげなく聞く。

「まあまあ須美ちゃん、どれが欲しい?」

「……いえ、大丈夫です」

あ、ちよつと欲しくなってきたな。チラチラと景品を見てる。他の二人が貰っているの(一人はまだ選んでる最中)を見て自分も欲しくなったのだろうか。しかし、意志が固い。欲しくなつてはきたものの、自分からは言い出せないのだろう。だから俺は受け取ってくれるであろう言い方で話す。

「そっか、なら、俺を助ける為に貰ってくれない?」

「勇太さんの為……?」

須美ちゃんは困惑している。多分、なんで貰うことが俺の為になるのかが分かってないな。

「そう、俺の為。いやー、これらを持って帰った場合、俺の部屋がめちゃくちゃにメルヘンになっちゃうんだよ」

「ブフツ」

吹き出す銀ちゃん。でもさ、もう俺の部屋ぬいぐるみとかいっぱいあるんだよ。しかも部屋の半分くらいはぬいぐるみ達に占拠されてるんだよ。

「という訳で、貰ってくれない?」

こうやって、プレゼントの受け取りをお願いするように言えば、きつと貰ってくれるだろう。そう思った俺は正しかった。

「……! それなら、これをいただけますか?」

「良いよ、何を選んだのかな?」

須美ちゃんが指し示すものを見た俺はめちゃくちゃに困惑した。何故なら、須美ちゃんが選んだものが、西暦時代の戦艦だったからだ。選ばれたのは、大きなウサギではなく、戦艦でした。確か……『翔鶴』とかそんな感じだった気がする。

「それで良いの?」

「はい!」

「戦艦好きなんだ?」

「はい! 我が国を守るために戦い抜いた人類の叡智……!」

「そのシリーズなら、開けてすらいらないのが家にあるから今度あげよう。確か……『瑞鶴』だったかな?」

「本当ですか!?!?」

「あげるよ。置く場所ないからね」

「ありがとうございます!」

このプレゼントで少しでも距離が縮まれば良いんだけど、上手いかな。ま、それは後々なんとかなるだろう。さてさて、選り途中の園子ちゃんはと。

「はい、どういたしまして。園子ちゃんは決まった?」

「これにするんよ〜」

「……………」

そう言っただけで選ばれたのは、ネコっぽい枕的なものだった。それを見た俺はかなり困惑した。だって、俺、そんなの取った覚えないんだよなあ。でもここにあるってことは取ったんだろなあ。

少しの間動きが停止した俺を見た園子ちゃんが心配そうに聞いてくる。

「ダメ、だった？」

「そんなことは無いよ。いや、デカウサギが売れ残るとは思ってもみなかったからさ」

「あー、確かにそうですね。置く場所あるんですか？」

最も大きい景品のウサギが売れ残ったことに驚いたと言いつつ述べてると、銀ちゃんが会話に入ってきた。

置く場所か、無いな。どうしようか。

「んー、あ、良いことを思いついた」

「すごく悪いことを企んでいるような顔なのですが……」

「親友に投げつけるとするよ」

「お友達に投げつけるの〜？」

「そう、仲が良い友達にね。そいつには妹がいるし丁度良いかなって。

よし、そうと決まれば帰りがけに家に寄って行こ」

「いや、投げつけちゃダメじゃないすか？」

悪い笑みを浮かべる俺を見て、三人は苦笑を浮かべていた。

さて、ここからは気のいい兄貴ではなく頼れる兄貴となろう。祝勝会で俺がやるべきことは、三人が仲良くなれるようにすることと、須美ちゃんの考えを少しばかり、変えることだからな。

第八話 結城勇太は兄貴になる。

さて、ここからは頼れる兄貴となろう。そう意気込んではや数分、俺は、微笑ましい光景を目にし、可愛いなあと思っていた。俺は表情筋が緩むのを本気で防いでいたが、少し緩んでしまい微笑みを浮かべていた。

「え、えつと、今日という日を無事に迎えられたことを、えー、大変嬉しく思います。えつと、ほ、本日は大変お日柄も良く、神世紀二百九十八年度勇者初陣の祝勝会ということで、お集まりの皆様の今後ますますの繁栄と健康、そして明るい未来をおい n……」

「かたっ苦しいぞー、かんぱーいー」

「はい、かんぱーい」

緊張しながらも開会の挨拶をする須美ちゃん。緊張によるものなのか須美ちゃん自身の性質なのかなかなか固い挨拶を披露する。そこを銀ちゃんが年相応の、いや、銀ちゃん流の開会の挨拶、『かんぱーい』を披露する。それに乗っかる俺。園子ちゃんは微笑みながら二人を見ている。それにしても銀ちゃん、ジュースの飲みかた可愛すぎか？

「ありがとうね、すみすけ」

「……？」

「私もね、すみすけを誘うぞ誘うぞって思ってたんだけど、でもなかなか言い出せなかったから、すごく嬉しいんだよー！」

「うん、鷺尾さんから誘ってくるなんて初めてじゃない？」

「実はそうなんだよー！」

「合同練習も無かったしなー。なのにアタシら、初陣よくやったんじゃない？」

「ねー。私も興奮しちゃって、ガンガン語りたかったんだよー」

園子ちゃんがそう言うと、須美ちゃんは少し暗い顔をしながら開会の挨拶の書いてある紙を折りたたみ座った。

小学生三人が話を始めた。同じクラスだったら簡単に会話に入れたんだろうなあ……。ん、いや、ダメだ。同い年になってしまったら

兄貴ムーブに支障が生じる。そんなことを思った直後、須美ちゃんが話し始める。

「私も……実はその、話をしたくて……二人と勇太さんを誘ったの」
銀ちゃんと園子ちゃんは笑顔で顔を見合わせていた。良い光景だ。かわいい。

……じゃなくて、話したいこととはなんだろうか。俺の考えていたものだったら、俺は少し須美ちゃんのことをみくびっていたことになるなあ。

「私ね、二人のことをあまり信用してなかったと思う。勇太さんもそう。……でも、それは二人のことが嫌いとかそう言うのじゃなくて！」

……私が、人を頼ることが苦手で……」

「すみすけ……」

「でも、それじゃダメなんだよね。一人じゃ……私一人じゃきつと、何も出来なかった。二人がいて、勇太さんもいたから……。あの……だから……その……これから私と、仲良くしてくれませんか!?!?」

御役目で俺が感じた自分一人で戦おうとする欠点を理解して、それを受け止めた。最近の小学六年生ってすごいんだな。それと、

「もうすでに仲良しだろ?」

「え……」

「嬉しい! 私もすみすけと仲良くしたかったんだ! ほら、私も友達作るの苦手だったから」

二人とも良い子だから、仲良くなれない訳がない。会って数十分の俺ですら良い子だと思うんだから。そんなことを思っていると、いつものまにかあだ名会議がおきていた。

「乃木さん……」

「すみすけも同じ思いだったんだ、嬉しいなく、すみすけ」

「あの、乃木さん……」

「はーい!」

「その、いつの間にか言ってるすみすけってというのは何……?」

「あ、いつの間にかあだ名で呼んでた」

「自覚なかったのかよ……」

「う、嬉しいけど、その……それ、あまり好きじゃないかな」

「じゃあ、ワッシーナは!? アイドルっぽくない?」

園子ちゃんはあだ名で呼びたいんだな。そんなすぐにあだ名をつけられるのは才能だな。……まあ、気に入られるかは別として。

「もつと嫌よ」

「え〜」

「乃木さんもソノコリンとか嫌でしょ?」

一瞬にしてソノコリンという返しを思いつくなんて、須美ちゃん……さては天才だな? ていうか園子ちゃんにそれは逆効果じゃないか?

「わあ、素敵〜」

「ごめんなさい、忘れて」

どうやら園子ちゃんにはストライクだったようで、目をしいたけみたいになっている。それを見た須美ちゃんは困ったように言っていた。次の瞬間、園子ちゃんが新たなあだ名を考案する。

「あつ、閃いた! じゃあ、わっしー! どう?」

「うーん……まあ、それでいいかな」

「〜! よろしくね! わっしー!」

「う、うん」

折れたー。園子ちゃんの期待に満ち溢れたしいたけ eye に敗れました! 鷲尾須美選手、これよりわっしーと呼ばれることになりました! す!

「よし、じゃあアタシのことは銀って呼んでよ! 三ノ輪さんはよそよそしいなー」

「そうだね〜」

「え、えーつと……」

園子ちゃんは受け入れられたが銀ちゃんはまだ無理そうか。ま、これから慣れていけば良いだけの話だからな。

「あはははは、まあいっか。よーし、それじゃあ今日という日を祝つて! みんなでここの絶品ジェラートを食べよう!」

「……へ?」

「いいね、買いに行こうか。好きな頼みなよ。お代は俺が持つから気にしないで。あと、俺のことは気にしなくて良いよ。初対面の人だから、仕方ないことだよ。それと、仲良くなるのは大歓迎だよ」

そろそろ会話をしたかった俺は銀ちゃんの提案にいち早く便乗し、頼れる兄貴ムーブをかます。とりあえずジュエラート買った後に会話して仲良くなろう。それで兄貴に認めてもらおう。須美ちゃんへのフォローも忘れずに。

「やったー！」

「ありがと〜」

俺は立ち上がり、三人を見て言った。銀ちゃんと園子ちゃんはすぐに喜び、礼を言ってくれた。須美ちゃんは少しの間ほかんとした顔をしていた。が、すぐに普通の顔に戻った。とても良い目をしている。御役目の時とは違う、自分を見つけた目だ。ここから人を頼ることを覚えていってくれればいいな。

そんなことを考え、口に含んだコーラの甘さを感じながら、何味を買おうか悩んでいると、

「……はいー！」

わお、須美ちゃん良いお返事。

◇◇◇

「さて、三人共。俺は三人をどう呼べばいい？」

ジュエラートを買い終え席に戻った後、俺は話したかったことを切り出す。

「アタシは銀で！」

「ん、じゃあ銀ちゃん、よろしく」

「ハイ！」

「園子ちゃんは？」

「私はそのままで良いんよ〜」

「了解。よろしくね、園子ちゃん」

「は〜い」

「須美ちゃんは？」

「お好きなように呼んでいただければ……」

「ワッシーナちゃんって呼んでも良いの？」

「それは！ 意地が悪いです……」

「ごめんごめん、須美ちゃんが良いかい？」

「……」

ちよつとの悪戯心が顔を出し、意地悪をしてしまう。少し拗ねた様子で、コクリと首を小さく振る須美ちゃん。見てて可愛いっす。意地悪してごめんね。

「それじゃあ須美ちゃんも、よろしくね」

「……はい」

「敬語じゃなくて良いよ。さっきも言った通り、俺を兄と思ってくれ！」

「んー、じゃあ普通に兄ちゃんかな！」

「素晴らしい」

「私はおにくちゃんって呼ぶよー」

「それもまた素晴らしい」

銀ちゃんと園子ちゃんのそれぞれ違う兄の呼び方、なんと素晴らしいのだろう。心が揺れる。

「……勇太大佐。」

「え？」

「お、おにいちゃん……」

「……」

今、何が起きた。須美ちゃんのお兄ちゃん呼びが可愛すぎて0.01秒意識を失った。これは、対年上用大量虐殺兵器『戸惑いながら上目遣いでお兄ちゃん呼び』だ。この俺でさえも意識を刈り取られるとは。

「ゆ、勇太さん……？」

もう一度聞かねば。

「もう一回言ってくれるかい？」

「え……？」

「さあ！」

「何をしてんだバカ兄ちゃん」

「ぐはあ」

銀ちゃんによるチョップが脳天に突き刺さる。やばいな、兄ちゃんと呼ばれながらのチョップで幸せな気持ちになってきた。……これが修学旅行のときに春信が言っていた妹欠乏症か。今まで発症していなかったというのに何故いきなり。

「須美が可愛いのは分かるけど、小学生に迫る高校生ってどうなの？」
「かつ、かわつ!?？」

可愛いと言われ照れる須美ちゃん。言われ慣れてないんだろうな。小学生くらいなら可愛いとかは言い合ってそうだけど。きつと周りの子は、須美ちゃんが真面目すぎて近寄り難いんだろう。間違いない話をしてみれば仲良くなれると思うんだけど。

「確かに。ありがとう、銀ちゃん」

「へへっ、どういたしまして！」

「わあ、ミノさんとおにくちゃん兄妹みたいなんよ」

「園子ちゃんも俺の妹だよ」

「わくわく！」

二人の頭を撫でる俺。二人ともめつちや良い笑顔だな。なんて尊い光景なんだ。だが俺は三人を妹にすると決めてしまったんだ。そのためには、須美ちゃんにも兄と呼んでもらわねばならない！

「ねえ、須美ちゃん。俺のことなんて呼んでくれる？」

「……兄さんと呼びます」

めちやくちや恥ずかしそうに俯きながら言う須美ちゃん。なんだ？ 年上を殺そうとしてるのかってくらい可愛い。どうしよう、甘やかしたい。……この状況を考えたら春信にシスコンって言えないな。

……俺、シスコンでいいや。よく考えたら元からシスコンじやん。向こうに居た時間で友奈が産まれてから基本的に友奈と一緒に居たし、めちやくちやに甘やかしてたし。友奈は親より俺と居たもんな。ずっと会えてなかったから俺の身体は妹を欲していたんだな。そうと決まれば、

「兄です。よろしくお願いします」

俺は、死ぬ程晴れやかな気持ちで須美ちゃんと握手をしながら言っ

た。多分めちやくちや良い笑顔だったと思う。

祝勝会はまだまだ始まったばかりだ。

拝啓

父さん、母さん

私、結城勇太は新たに三人の妹が出来ました。そして親友の妹も兄と慕ってくれているので実質四人出来ました。やばいです。可愛いです。もう私は世間一般でいうところのシスコンという部類に入ると、何がいいたいかというと、

妹って、可愛いですね。

敬具

第九話 結城勇太、二度目の御役目。

須美ちゃんたちとの祝勝会から半月が経過し、俺は樹海に立っていた。二度目の御役目は、天秤的な形をした、竜巻きを起こす敵だった。「身動きとれねーよ！」

3人はバーテックスが出現してすぐに近寄ってしまったから、風の影響をモロに受けて、動けない状況にいる。もちろん俺も今身動きが取れない状況だ。近寄っちゃった☆。……やるなら上からなんだけど、どうやって上まで行こうか。

「あのぐるぐる、上から攻撃すると弱そうだけど！」

「どうしようもない！ 羽はズルいよな！ ……須美!?!？」

須美ちゃんが二人から手を離し、攻撃を仕掛ける。が、この敵に弓は相性が悪すぎるな。

「南無八幡大菩薩！ ……そんな！」

「あ、危ない！」

ぶら下がってる塊を園子ちゃんが広げた槍で受ける。そして須美ちゃんは飛ばされていく。まずいな、小学生が受け止めていられる攻撃じゃないぞ。それに、このままだと須美ちゃんにあの塊が直撃するな。……やるしかないな、覚悟決めろ。

「銀ちゃん！ 俺が3つて言った時にアイツに向かって飛んでくれ！ そのタイミングならあの塊に干渉されないで風で簡単に上に行ける！ そのあとは上から攻撃を叩き込む！」

「オツケー、兄ちゃん！」

「1、2の、3！」

竜巻きを利用して、俺と銀ちゃんは飛び上がる。やべ、ちょっと飛びすぎたな。まあいいや。銀ちゃんが切るものの、弾かれてしまう。何度か切りかかるが、やはり弾かれる。だけど、回転は少し弱まった。俺は声を張り上げ、銀ちゃんへ言う。

「銀ちゃん！ そのまま着地してくれ！ 後は俺がやる！」

「了解！」

俺の言葉に簡潔に返事を返して落ちていく銀ちゃん。良い仕事し

てくれたよ。ありがとう。

俺は回転しながら落下し、敵の頭頂部に踵を叩き込む。敵の黄色い体に罅が入り、割れていく。落下する最中に、敵の体へダメ押しで拳を叩き込む。罅が大きくなり、真つ二つに割れたのを見届けながら着地をする。

「……ふう、なんとかなった」

「兄ちゃん！ 大丈夫!?？」

「うん、心配いらないよ。ありがとね、銀ちゃん」

鎮華の儀を眺めながら会話をする。今回は少し無茶をしちやったなあ。もつと安全な戦い方を考えた方が良さそうだ。今回のなんて言ってしまうえばゴリ押しだもんなあ。

◇◇◇

「ゴリ押しにも程があるでしょう！」

「「はい……」」

俺は神樹館の教室でお叱りを受けていた。もちろん小学生三人も一緒に怒られている。

「これじゃあ、あなた達の命が幾つあっても足りないわ。御役目は成功して、現実への被害も軽微なものですんだのはよくやってくれたけども……」

「それは、三ノ輪さんと乃木さん、それに兄さんのお陰です」

銀ちゃんと園子ちゃんは嬉しそうな声を上げる。俺も嬉しいんだけど、今回の勝ち方はあまり良くないからなあ……。ちよつと浮かない顔になってしまった。

安芸さんが俺に話しかけてくる。俺の浮かない顔に気づいたのだろうか。

「はあ……、勇太くん、何が言いたいか分かるかしら」

「連携の演習不足、ですかね」

「正解です。まず、4人の中で指揮をとる隊長を決めましょう。……

勇太くん、隊長を頼めるかしら」

「俺は隊長じゃない方が良いと思います。俺は自由に動いて敵を探りながら戦う方が良いでしょうし」

「そう、なら貴方から見ても誰が良いと思う?」

「……園子ちゃんですね」

須美ちゃんが驚いた表情をする。あー、なんで園子ちゃんが良いのか分かってないな。というより、小学生三人とも分かってなさそうだ。園子ちゃん自身も驚いた顔で俺を見てくる。

「そうね。なら、乃木さん、隊長を頼めるかしら」

「え? わ、私ですか?」

「アタシはそういうのガラじゃないから、アタシじゃなければどっちでも」

……須美ちゃん、俺が園子ちゃんを推薦した理由を家柄とか考えてないよな?

さつきまで驚いた顔だったのに今は普通の顔に戻って、なんなら微笑みを浮かべている? 自分がしつかりしなきゃとか考えてそうだなあ。うーん、園子ちゃんのことをまだしつかり理解できてないんだな。

「私も乃木さんが隊長で賛成よ」

「わっしー……」

「決定ね。神託によると、次の襲来までの期間は割とあるみたいだから、連携を深めるために合宿を行おうと思います」

「合宿?」

三人はそう言って不思議そうな顔をする。合宿は親睦を深められて、なおかつ鍛錬にもなるし、いつもと違う環境に行くことで息抜きにもなる一石三鳥な行事だ。素晴らしいね。

そうかい、合宿ねえ。楽しそうだなあ。

「楽しんできなよ」

「何を言っているの、勿論貴方もよ。勇太くん」

「……え?」

◇◇◇

帰り道、俺は安芸さんに言われたことを思い出し、立ち止まっていた。

『連携を深めるために合宿を行おうと思います』

『何を言っているの、勿論貴方もよ』

あー、俺もかあ。……連携の訓練だもんなあ。そりゃ、俺も呼び出されるよなあ。授業が遅れるのは……別に問題ないな。予習はバツチリだ。

合宿かあ、なかなか楽しみな。とりあえず、公欠届け出さないと。よし、帰ったら書こう。アイツらにお土産買わないとな。

そんなことを考え、俺は微かに笑いながら家に向かって歩き出した。

第十話 結城勇太は合宿に行く。

今日は合宿に行く日だ。須美ちゃんたちとは現地集合にしても良かった。その理由は、家からそこそこ離れた讃州サンビーチまで走って行こうと思ったからだ。(A. M. 0:00)

何でこんなに早く家を出るのか、それは早く行って砂浜でトレーニングがしたいからだ。砂浜でのトレーニングはいつもよりも効果が高いから、楽しみだなあ。あと、久しぶりに全力疾走したいから車通りが少ないこの時間帯に家を出るっていう理由もある。

「さて、ポストンバック持ったし、行くか」

父さんたちへ書き置きを残して、俺はポストンバックを持ち、2リットルのペットボトルを身体中にくくりつけ、走り出した。

◇◇◇

やって来ました、讃州サンビーチ。広い砂浜と、透き通る海水。そしてゴミ一つ落ちてない綺麗さ。本当にいい場所だなあ。

大橋市から走ること一時間弱、俺は故郷の讃州市にある、海水浴場、今回の合宿の地へ辿り着いたのだった。

「重りがなければもっと早く着いたのになあ。……それにしても、疲れたなあ」

疲れた。到着したは良いものの、トレーニングをやる気が起きない。……よし、砂遊びしよう。(A. M. 1:00)

◇◇◇30分後◇◇◇

「ダメだ……！ まだまだ足りない……友奈はもっと可愛らしい……！ 全体的に気に入らないな。よし、もう一度」

◇◇◇10分後◇◇◇

「さつきよりは良くなったけど、まだ違う！」

◇◇◇10分後◇◇◇

「……何で俺は気づかなかったんだ。砂友奈に足りないのは、友奈の天真爛漫さだ……！ よし、ゴールが見えた！」

◇◇◇10分後◇◇◇

「最後にここを整えてつと。よっしゃ、完璧だ。砂で友奈を作るのは

なかなか難しかったな」

苦節一時間、俺は砂友奈を完成させた。本人と寸分の狂いもない最高傑作だ。友奈の魅力を最大限引き出した至高の作品。服のヒラヒラ感も頑張つて再現しました。

頑張つて作った友奈を写真に撮っていると、早朝のランニング中だったららしい女の人が近寄つて来た。安芸さんではなかった。

「お写真、お撮りしましょうか?」

「お願いします!」

俺はすぐに頼んで、写真を撮つてもらった。その後、女の方は写真をもらつていいかと聞いてきた。もちろんオツケーした。

女の人が帰つた後、俺はトレーニングを始めた。

◇◇◇A・M・? :?? ◇◇◇

やべえ、気づいたら空が明るい。今日のトレーニングの結果としては、とりあえず海の上は走れるようになったな。足が沈む前に次の足を出す。この動作を繰り返せるようになれば簡単だった。ただ、慣れるまで海に落ちまくつたから、ジャージはビツシヤビシヤだった。

「うーん……順調に人間卒業してきてるなあ」

次は空を走れるようになるう。着地を安全にするために! (第五話参照)

そんなことを考えながら着替える俺。安芸さんに渡されたジャージすごいな。動きやすい。私服、ジャージにしようかな。

「兄ちゃん!」

「おにーちゃん!」

背部に走る二つの衝撃。気を抜いていたからか少しだけよろめいてしまった。俺は振り向き、二人の頭を撫でながら挨拶をする。笑みを浮かべた二人は可愛すぎると思いました。まる。

「おはよう。銀ちゃん、園子ちゃん」

「おはよう!」

「おはようなんよ!」

銀ちゃんは離れたが園子ちゃんは抱きついてくる。そこに、須美ちゃんがやつてきた。

「もう、置いてかないで。三ノ輪さん、乃木さん。おはようございます。兄さん」

「おはよう。須美ちゃん」

もちろん須美ちゃんも撫でながら挨拶をする。須美ちゃんも撫でると笑顔になる。可愛い。妹って良いよね。なんか、こう、良いよね！

「あれ、兄ちゃん荷物は？」

「そこに置いてあるよ。トレーニングしてたから、着替えを置いてこうと思つて」

「おお、ストイックなんよく！」

「やつぱり二人は勇者としての心構えができていないわ！」

「まあまあ、須美ちゃん。気負いすぎないのも勇者の仕事の一つだよ。気負いすぎて動けなくなつちやつたら目も当てられないからね。そういうえば、三人は荷物はどうしたの？」

「もう部屋に持つてったよ」

「そうなのか。なら、俺も荷物置きに行くか。あ、安芸さん居る？」

「先生ならもう来てたよ」

「え、本当に？ 気づかなかつたなあ。ま、とりあえず宿に行こうか」俺がそう言うと、三者三様の返事が返ってきた。砂浜を出て、歩くこと数分、合宿で泊まる宿に着いた。

「おはようございます。安芸さん」

「おはよう、勇太くん。荷物は置いてきてね」

「はい、すぐに置いてきますね」

以前より仲が良くなつた安芸さんに挨拶をする。この前ばつたり会つて、手伝いとかしたら仲良くなりました。

「先生、いい感じじゃないですかあ」

「三ノ輪さん、ふざけないの」

「痛ああ！」

荷物を置きに宿に入ろうとした瞬間、銀ちゃんが何かを言って叩かれている。何をしてるんだか。俺は自然と笑みがこぼれる。……早く置いてこよう。そして、合宿を楽しもう。俺はそう思つて、部屋に

向かった。

◇◇◇

部屋に荷物を置いた後、すぐに外へ向かう。

「お待たせしました」

「大丈夫よ。さあ、合宿を始めるわよ！」

「「「おお——！」「」」」

安芸さんの言葉に勇者四人で返事をする。この合宿で、良い連携がとれるようになるう。そして、全員無事で御役目を終えよう。そんなことを考え、俺たち五人は砂浜へと歩いていった。

第十一話 結城勇太の合宿初日。

「御役目が本格的に始まったことにより、大赦は全面的に貴方達勇者をバックアップします。家族のことや学校のことには心配せず、頑張ってください」

「はい！」」

安芸さんの言葉に元気よく返事する勇者姿の三人とジャージ姿の俺。まだ駄目だつて言われたけど、鍛錬したいなあ。

◇◇◇

「準備はいい？ この訓練のルールはシンプル。あのバスに無事、三ノ輪さんを到着させること。お互いの役割を忘れないで」

「いくよ〜」

「上手く守ってくれよ？」

「私はここから動いちゃダメなんですかー!?!?」

「ダメよー!」

「参加したいなあ……」

「駄目よ。貴方は合わせられるだろうけどね」

「ああ、なるほど。まずは三人で連携が出来なきゃってことですか」

「良い観察眼を持つてるわね」

「ありがとうございます」

「……はい、スタート!」

安芸さんが手を叩き、開始を告げる。

「いくよ〜!」

園子ちゃんがそう言うと、園子ちゃんと銀ちゃんが走り出す。槍を傘の様な形に変え、飛んでくるボールを防御する。須美ちゃんは園子ちゃんの槍でカバー出来ないところのボールを射抜く。

「ここからジャンプしちやダメなのか？」

「ズルはダメだよ〜」

訓練の趣旨が吹き飛ぶことを言う銀ちゃんとそれをすっかりダメと言う園子ちゃん。……あ、須美ちゃんが外した。てことは、

「らくしよ……うがつ!」

「アウトー！」

だよねえ。当たるよねえ。

「ごめんなさい三ノ輪さん！」

「ドンマイだよー！ わっしー！」

「呼び方も固いんだよ。銀でいいぞ、銀で」

「私のことはそのつちでー！ はい、呼んでみてー」

「う……」

「はい！ もう一回！ ゴール出来るまでやるわよ！」

須美ちゃんが謝って、二人が励ます。まだ呼び方を変えるのは難し
そうだなあ。あ、アドバイスをしよう。

「須美ちゃん、もう少し広く場面を見た方が良いよ！ 頑張れ！」

「はい！」

良いお返事を返してくれる須美ちゃん。良い妹ですね。

◇◇◇

そして夕方になった。今日は流石にゴール出来なかったか。でも、
この分なら合宿中に良い連携が出来るようになりそうだ。そんなこ
とを考えてニコニコしていると、安芸さんが不意に言ってきた。

「ねえ、勇太くん。あの件、今出来るかしら？」

「あ、やります？ 良いですよ、動きたかったので」

「決まりね。乃木さん、三ノ輪さん、鷲尾さん！ こつちにいらっしや
い！ 今から勇太くんが一人で挑戦するわよ！ ボールへの攻撃は
無し、純粹に全部避けるのを見せてくれるわ」

「え、兄ちゃん一人で？」

「しかもボールを撃ってくる装置が増えてるんよ？」

「本当にやるんですか……？」

「うん、やるよ。あ、銀ちゃん、この動きは銀ちゃんが出来るようにな
らないとダメだからね」

「うえっ!?」

「良いですよー！」

「それじゃあ、スタート！」

おかしいな、弾幕の密度が高いぞ？ 弾幕シューティングゲーム的

な感じなんだけど？ ……弾けないのはなかなか面倒だな。でもこの鍛錬は新しく楽しいな。そう思いながら、ボールの合間を縫って進む。そして踏み切って空中へ。

え、待って、空中でも撃ってくんのか？ それは想定外。 ……危なかった、当たるかと思った。俺は上半身を勢いよく回し、空中で身体を回転させてボールを避けた。その後、着地と同時にバスに触れ、安芸さんたちのいるところへと跳ぶ。

「ふう……、クリアつと」

小学生三人は驚いた顔をしてる。っていうよりぽかんとしてるな。信じられない光景を見た瞬間みたいになってる。大丈夫、海の上を走るよりか簡単だったから。安芸さんはうんうんと頷いてる。満足げだなあ。俺は一息ついて、銀ちゃんに言う。

「こんな感じかな。この合宿中に、連携だけじゃなくこれも出来る様になってね」

「は、はい」

「これが出来れば、被弾が圧倒的に減ると思う。近接攻撃をする銀ちゃんは、これが出来た方がよいよ。明日からちゃんと教えるよ。頑張ろう」

「はいー！」

「二人は訓練中に気になったところがあれば言うよ。今すぐに出来た方がよい動きはないからね」

「はいー！」

「ほら、旅館に戻るわよー！」

さて、今日のところはこれで終わりだな。旅館で寝るのなんて初めてだから楽しみだなあ。

「この合宿中、四人には基本的に一緒に行動してもらいます」

うわあ、合宿感増したなあ。

◆◆◆

美味しい料理に五人で舌鼓を打った後、俺は自分の部屋で日課の日記を書いていた。書き終わったら風呂に入ろう。そう思って書き進める。

「……よし、これで終わり。さ、風呂風呂」

露天風呂、それはいつもの風呂と違って室内ではなく外で風呂に入れるという素晴らしいものだと思っていた。実際に体験してみても分かったことがある。やべえ、もう風呂から出たくない。

「やばいなあ……、気持ち良すぎだろお……」

冬のこたつと同じような魔力を感じる。多分これ出れなくなるやつだ。もう少ししたら出よう。そう考えて、俺はまだ入っていた。

「いや、そろそろ出よう。流石に長風呂過ぎる。よし、出よう」

俺は決心し、脱衣所へ向かう。脱衣所の時計は、俺が風呂に入ってから一時間経過していることを示していた。……気持ち良かったあ。

その後、俺はコーヒー牛乳を一気飲みするという夢の一つを叶え、部屋へと向かった。

第十二話 結城勇太の合宿二日目。

合宿二日目、訓練最終日となる今日、俺は三人を応援していた。多分もう少してゴールできるだろう。あつ、銀ちゃんが空中でボールに当たった。まあ、とりあえず休憩だな。

「三人とも、こつちおいで」

俺は手招きをしながら呼びかける。小走りで近寄ってくる三人、可愛いつす。

「兄ちゃん、どしたの？」

「少し休憩を挟んだ方が良いよ。だってもうすぐ三時間だよ」

「わく、ほんとだく。もうそんなに経ってたんだく」

「……」

「須美ちゃん、どうかしたかい？」

元気な銀ちゃんと園子ちゃんとは対照的に少し沈んだ感じの須美ちゃん。まあ、確かに少し沈んじやうのも分かるかな。

「私、ボールをしつかり撃たなきゃいけないのに、何度も外してしまつて……」

「そうだね、確かに少し外しちゃったね。でも、多分だけど須美ちゃんはまだ少ししたら絶対にボールを撃てると思うよ。アドバイスとしては、やっぱり視野を広げることかな。今は銀ちゃんたちの周りを見るけど、銀ちゃんたちを視界の真ん中に配置して、空間を把握してごらん」

「……はい」

「不安？ ……大丈夫、君なら出来るよ」

「はいー！」

これで少しは元気になれたかな。そう考えていると銀ちゃんと園子ちゃんが歩いてくる。

「お、やる気に満ちてるなー！ 須美！」

「やる気マックスだね、わっしー！」

「ええ！ 次こそは成功させるわよ、三ノ輪さん！ 乃木さん！」

「あと五分したら再開するわよ。それまでゆっくりしてなさい」

「「はいー！」」

◇◇◇

結論から言おう。三人は連携の訓練をクリアした。園子ちゃんが飛んでくるボールの大半を傘状にした槍で受け、園子ちゃんがカバ―しきれないところからのボールを須美ちゃんが的確に落としていく。そして銀ちゃんが空中へと跳んで、ボールを切りながらバスへ一直線で向かっていく。……待って、その勢いだとき、

「ゴ―ールー！」

そうだよ、バス、切り刻むよね。うわあ、細切れじゃん。……パ―ツ拾わなきゃ。それが終わったら三人をしつかりと褒めよう。ただ、その前に安芸さんからお叱りがありそうだなあ。

「俺、先にあの残骸片付けてきますね」

「ごめんなさい、頼むわね」

「お任せを。……あまり怒らないであげて下さいね？」

「……分かってるわよ」

「それじゃあ、行ってきます」

俺は安芸さんと少しだけ言葉を交わし、バスだった物の散らばるところへと跳ぶ。着地した俺に銀ちゃんが満面の笑みで近寄ってくる。左右に揺れる尻尾が見えた!?……気のせいかな。訓練をクリアしたのはすごい、ただ残念ながら、安芸さんが怒っていることを伝えると、怯える子犬のようになってしまった。かわいそうだけどかわいい。

「兄ちゃん、クリアしたよ！　すごいでしょ！」

「うん、すごいと思う。よく出来ました。ただ……」

「どしたの？」

「いやあ、バスのことで安芸さんがお話しがあるって」

「あ……」

「まあ、とりあえず先に下に戻っててよ。俺は少しやることあるから」

「うん！　分かった。先に行ってるね！」

「はい。……さてと、早いとこ片付けますか」

俺は銀ちゃんが降りていくのを見送った後、バスの残骸を片付ける

作業に入った。とはいっても、散らばったパーツをとりあえず道路の邪魔にならないところに置くくらいしか出来なかったためすぐに降りた。

「訓練をクリアしたのはすごいことだけれど、バスを壊すことはなかったんじゃないかしら」

「……ハイ」

「……まあ、よく出来ました。バスのことはもう気にしなくて良いです」

「だって、良かったね。銀ちゃん」

「あ、兄ちゃん、おかえり！」

降りてすぐに安芸さんのお叱りが終わったため、俺は銀ちゃんに戻ってきたことを伝える。銀ちゃんからおかえりという言葉が聞こえた。なんて良い言葉なんだろう。

「ただいま、二人もよく頑張ったね。おめでとう」

「えへへへ、頑張ったんよ」

「……」

「うん、見てたよ。頑張ったね。須美ちゃんも、おめでとう」

良い笑顔の園子ちゃんを撫で、上目遣いでチラチラとこちらを見る須美ちゃんも撫でながらも一度褒める。二人とも可愛いなあ。よしよし、もつと撫でるぞー。後ろにいる銀ちゃん表情が笑顔から嫉妬をしているような顔になっていく。

「おいで、銀ちゃん」

「へへっ、よっしゃ！」

「おつとと、元気だね」

銀ちゃんは俺の首元に抱きついてくる。園子ちゃんと須美ちゃんから手を離し、銀ちゃんを抱っこする。二人からの寂しそうな顔が罪悪感を刺激する。ごめんよ、また後で撫でてあげるから。そう考えていると安芸さんがこちらに近づいてくる。

「勇太くん、乃木さん達が少し休んだら三人と連携してみてもらえる？」

「はい、分かりました」



「乃木さん、三ノ輪さん、鷺尾さん、次は勇太くんとの連携よ。ボールの数は二倍、三ノ輪さんか勇太くんのどちらかが当たったらやり直しよ」

「二はい！」

「勇太くんは三ノ輪さんの後ろについて」

「はい、途中で銀ちゃんが当たりそうな時にリカバリーに入ってもいいですか？」

「いいわよ。ただし攻撃は禁止よ」

「ご要望通り一発でクリアしてみせますよ」

「出来るでしょうね。それじゃ、位置について。……スタート！」

俺を入れて初の連携訓練が始まった。園子ちゃんと銀ちゃんの後ろを走っていく。いや、園子ちゃんへの負担デカ過ぎん？ ボールが当たった後、ノータイムで次のボール当たってるんだけど。須美ちゃんもかなりの早撃ちしてるのに。これは、急いだ方が良いかもな。

「園子ちゃん、全力で走れるかい？」

「まだ……行けるんよ〜！」

「そっか、なら頼んで良いかい？」

「ラジャーなんよ〜！」

「銀ちゃん、園子ちゃんについて行って！」

「はいよ、兄ちゃん！」

「それじゃ、行くよ〜！」

俺が立てた作戦は園子ちゃんに出来る限り全力で走ってもらって、その後を俺と銀ちゃんが追従する。簡単に言えば速攻を仕掛けたってことだな。須美ちゃんも意図を汲んだくれたようで園子ちゃんの邪魔になるボールを一つ、また一つと割っていく。

「ありがとう、園子ちゃん。行くよ、銀ちゃん！」

「りょーかい！」

そうやって俺と銀ちゃんは跳ぶ。空中の俺たちに向かってボールが飛んでくる。俺と銀ちゃんは、ボールを空中で避け、ゴール地点まで到達した。

「出来るようになったんだね。すごいじゃん」

「へへっ、ぶつつけ本番だったけどね」

「土壇場で出来るっていうのはすごいことだよ。おめでとう」

「うん、ありがとう！」

「じゃあ、戻ろうか」

「うん！」

銀ちゃん可愛いなあ。笑顔が眩し過ぎるって。俺の教えてた動きも出来るようになったし、素晴らしいな。本当に。

「ただいまー！」

「ただいま戻りました」

「おかえりなんよー！」

「おかえりなさい、三ノ輪さん、兄さん」

「有言実行お疲れ様。この後は少し鍛錬をして、勉強をして今日は終わりにします」

「ハイハイ！ 兄ちゃんの鍛錬見てみたいでーす！」

「確かにー！ わっしーはどう？」

「私も、見てみたいです！」

「だ、そうよ」

「良いよ。存分に見ていきなよ」

砂浜で鍛錬するなら走り込みが一番なんだけど、銀ちゃん達が見てるからなあ。よし、ここは一発派手なのを見せようかな。俺のオリジナル技を。……あれ、よく考えたら俺、教わったのを自分流に変えたからオリジナル技ばつかだな。まあいいや。

「結城流格闘術 海割うみわり！」

技名を口に出し、海に向かって拳を突き出す。

あれ、こんなに威力高かったっけ？ 海がしつかりと割れたねえ……。割れたねえ!? 中学生の頃より圧倒的に強くなってるなあ。そういうはずと海には来てなかったな。そりゃ成長したんだし強くなるか。

「……………」

絶句する四人。小学生三人はポカンとして、安芸さんは気絶してる

……。ちよつと待って、気絶!? まあ、そうなるかあ。とりあえず、宿まで運ぼうか……。無闇矢鱈に人に見せちゃ駄目そうだな。出来るだけ見せないようにしよう。

「えっと、三人とも。宿に、戻ろつか」

俺はそう言い、苦笑を浮かべながら安芸さんをおんぶして宿に戻った。

第十三話 不穏な気配

宿に戻ってきた俺たちは、とりあえず安芸さんを布団に寝かせた。そして安芸さんを起こしてしまわないよう、小学生三人の勉強を俺の部屋でみるようになった。

「はい、それじゃあ授業を始めたいと思います。今からやる科目は算数で、分数の乗除、つまり掛け算割り算についてやっていきます」

「はい兄ちゃん！」

「先生と呼んでくれ！」

「はい兄ちゃん先生！」

「三ノ輪銀ちゃん！」

「勉強はなしにしませんか!?!」

先生と呼ばれるのも良いものなんだなあ。兄ちゃん先生の破壊力やばいな。意識飛びかける。

銀ちゃんが勉強をすることに対して進言してくる。勉強したくないんだろなあ。微笑ましい。しかし俺は心を鬼にして勉強をすることを告げる。

「そういう訳にもいかないんだよね。まあ、出来る限り簡潔に教えるから」

「ま、頑張りますか」

「zzz……」

「マイペースね乃木さん……」

「とりあえずこのプリントに取り組んでみて。それで分からないところがあれば言ってみてね」

「兄ちゃん先生、たったの4問しかないけどいいの？」

「うん、掛け算割り算ともに基礎と軽い応用の問題を一問ずつ用意したからね。全問正解したら終わりだよ。……おかわりが欲しければすぐに作るよ?」

「いやー、4問頑張るぞー! 早く終わらせよー!」

早いとこ勉強を終わらせて、みんなで昨日買ったアレを食べたいな。そのために、銀ちゃんには少し頑張ってもらわないとな。

「ふえっ、おかあさん、起きてるよ〜……」

「乃木さん……」

寝ぼける園子ちゃんとそれを見て呆れている須美ちゃん。俺は園子ちゃんに声をかける。

「ほら、園子ちゃん。4問解いたら自由時間だから終わらせちゃいな」

「ふあ〜い……。……シャキーンなんよ〜！」

「うおっ、切り替え早いなー園子」

「……兄さん、採点お願いします」

「はい、えっと、丸、丸、丸、丸、丸、総じて花丸つと！ 全問正解、すごいね。おめでどう、自由にしていいよ」

園子ちゃんがバツチリと目覚めた直後、問題を解き終えた須美ちゃんがプリントを提出してきた。結果は全問正解、優秀。

「はい。兄さん、お茶を淹れて来ますね」

「うん、ありがとう。二人の分も頼んでいいかい？」

「はい、ただいま」

自由にしていいと伝えると、お茶を用意してくれるらしい。アレとお茶の相性はバツグンだからめっちゃくちや楽しみだなあ。

「終わったんよ〜！」

「はい、全問正解。流石だね」

「えへへ〜、嬉しいんよ〜」

その少し後に園子ちゃんも問題を解き終える。採点結果はもちろん全問正解。少し難しめにしたんだけどな。

「うげ、二人とももう終わったのかよー」

「銀ちゃん、後一問じゃん。頑張っちゃいな。終わったらご褒美があるから」

「マジで!??よっしや、やる気出てきた！……よし、これでどうだあー！」

「丸、丸、丸、丸。全問正解！ おめでどう、これで自由だよ」

銀ちゃんも全問正解、ちゃんとみんな勉強出来るんだねえ。関心関心。そんなことを考えていると、須美ちゃんが戻ってきた。

「兄さん、乃木さん、三ノ輪さん、お茶を淹れてきました」

「ありがとう。それじゃあ、はい、勉強お疲れ様」

「これは……?」

「この辺りにある老舗和菓子店の桜餅。俺の好物の一つなんだ。五個買ってきたからみんなで食べようよ」

「いただきますーすー! ……んー! 美味しい!」

「いただきますーすー! ……美味しいんよー!」

「いただきますーすー! ……これは、皮の柔らかさ、餡の硬さ、そしてそれぞれの味の調和が織りなす究極の美味!」

「気に入ってもらえてよかった。……うん、美味しいな。あつ、お茶美味しい」

三人に桜餅を渡し、食べ始める。美味しい。小学生の頃に弟子入りしたのは間違ってたな。師匠、元気だったなあ……。パワフルおじいちゃんって言葉がぴったりすぎる。

閑話休題。そこからは三人と話しをしたりトランプをやったり、外に出て軽く模擬戦をやったりして、いつのまにか夕方になっていた。

「んー、いい時間だね。そろそろお風呂に入ってきたよ」

「うわ、もうこんな時間になってたんだ」

「そうですね、お風呂に入ってきます」

「おにくちゃんはこのから何するの?」

「日記を書いて、俺も風呂に入るかな」

「日記を書いているんですか?」

「うん、最初は面倒だったけど慣れてくると楽しいよ。気が向いたらやってみな」

「うへえ、アタシは無理だなー」

「私はやってみようかな」

「まあ、お風呂に入ってきたよ」

「行ってきますー!」

「行ってきます」

「はい、行ってらっしゃい。……さて、日記書いて安芸さんを起こしに行くかな」



日記を書き終え、安芸さんの部屋の前に着くと扉が開き、安芸さんが出てきた。

「おはようございます、安芸さん」

「……ええ、おはよう。乃木さん達は？」

「さつきお風呂に行かせました。多分満喫してますよ」

「そう。……私も入ってくるわね」

「ごゆっくり。まあ、俺も入りに行くんですけどね」

「なら、一緒に行きましょう」

「はい、お供します」

そう言つて風呂に向かつて二人で歩き始める。会話があまり起きなかつたが、不意に安芸さんが言つた。

「……私は、乃木さん達を失いたくない」

「俺も同感です。あの子達は絶対に守り抜きます」

「でも、無理だけはしないで。私の失いたくない人の中に、あなたも入っているのよ。勇太くん」

「……！ はい、任せてください。絶対に守り抜いて、尚且つちやんと帰ってくるので」

「頼むわね。それじゃあ、また後で会いましょう」

「はい、また後で」

◇◇◇

そんなこんなで入浴後、五人で夕食を食べ、部屋に戻つてスマホゲームに勤しんでいた。気がつけば、もう十時を過ぎていた。

「そろそろ寝るかなあ。よし、寝よ」

俺は布団に入つてゆつたりと呼吸をする。すぐに寝るための技だ。あつ、ほら、もう眠気がきた。そんなことを考えながら、俺は意識を手放した。

◇◇◇

「……久しぶりにこの夢を見たな。やっぱり銀ちゃんだよな、あの子は」

夢から覚めた俺は独りごちる。

「絶対にやらせない」

あんな光景、見たくないし見せたくない。銀ちゃんが死んでしまうのは認めない。……もつかい寝るのはすぐには無理だなあ。少し、空でも見るとしようかな。

「……」

俺は星空に魅了され、何も言えなかった。その直後に部屋の扉がノックされた。こんな時間に誰だ？ そう思い、扉の覗き窓を覗き込む。するとそこには、枕を抱え、ニワトリのパジャマを着た園子ちゃんが立っていた。顔には焦燥が浮かんでいる。すぐに扉を開けて、話しを聞く。

「園子ちゃん、どうかした？」

「おにーちゃん、あの、あのね……」

「……とりあえず、中に入ってお話しましょう。ゆっくりでいいから、俺に話してくれるかい？」

「……うん、うん」

俺は胡座をかき、園子ちゃんを足の上に座らせて、園子ちゃんが落ち着くまで頭を撫で続ける。

「……ありがとね、おにーちゃん。少し落ち着いたんよ……」

「そっか、それは良かった」

俺は園子ちゃんから手を離し、しっかりと園子ちゃんの間を見る。

「……うん、ちゃんと落ち着いたみたいだな。

「……私ね、怖い夢を見たの」

怖い夢？ まさか俺が見たのと同じか？ もしそうならあの焦り具合も頷ける。

「どんな夢か、聞いても？」

「……死んじゃう夢。お兄ちゃんが、死んじゃう夢……！ ミノさんもわっしーも怪我がすごくて、お兄ちゃんが一人で戦って、それで……。うわああああああん！」

そこまで言って泣き出してしまふ園子ちゃん。俺は園子ちゃんを抱きしめ、頭を撫でながら言葉をかける。

「そっか、それは怖い夢を見ちゃったね。でも大丈夫、大丈夫だよ」

優しく語りかけ、抱きしめる力を少し強める。心なしか園子ちゃん

の抱きしめる力も強くなる。

「大丈夫、大丈夫。三人は死なせないし、俺も死なない」

「……うん」

俺が見たのとは違って、死んでしまうのは銀ちゃんじゃなくて俺とのこと。園子ちゃんは俺に必死にしがみついて泣いている。俺は園子ちゃんを撫で続ける。

「……寝付いたかな？」

すう、すう、と規則正しい寝息が聞こえてくる。どうやら眠りに落ちたらしい。とはいえこのままだと園子ちゃんの身体に負担がかかってしまう。俺にできることは園子ちゃんを布団に寝かせて、手を握ってあげることくらいだった。

「今回の件は、流石に許さないよ。神樹様」

園子ちゃんがいくら芯を持っているとはいえ、まだ小学六年生の女の子なんだ。そんな子にあんな悪夢を見せるのは、許せないな。俺は園子ちゃんの涙を人差し指で拭い、手を握り続けた。

第十四話 終わる合宿、戻る日常。

コンコン!

俺はノックの音で目が覚めた。園子ちゃんは俺の手を握ったまま未だすやすやと寝ている。手を離すことに若干の罪悪感を感じながら、扉へと向かう。そういえば、園子ちゃん達の部屋は襖だったのに、なんで俺の部屋は普通の扉なんだ? まあいいか。俺は扉を開ける。すると扉の前には、何やら焦った様子の須美ちゃんと銀ちゃんがいるた。

「おはよう、二人とも。こんな朝からどうしたんだい?」

「兄さん、乃木さんが……!」

「兄ちゃん、園子が何処に居るか知らない!?」

「あ、そういうことか。おいで、ただ、静かにね」

「?」

まあそうだよな、一緒に寝てたはずの友達がいなかったら驚くよな。それに直ぐに気がつかなかったのは疲れのせいかな? やっぱ座って寝るのはダメだな。話が逸れた。俺は二人を部屋へと入れ、園子ちゃんの寝ている布団を指し示す。二人は安堵の表情を浮かべ、座り込む。少しうるさかったのだろう。園子ちゃんが目を覚まし、挨拶をしてくる。

「おはよう、おにくちゃん」

「はい、おはよう。二人もおはよう」

「おはよう! 兄ちゃん! 園子!」

「あつ、えつと、おはようございます。兄さん、乃木さん」

「おはよう、わっしーにミノさん。……あれ? なんで二人がここに?」

「あなたを探してたのよ、乃木さん!」

「いやー、兄ちゃんのところにて良かった」

「あはは、ごめんね? ちよつと怖い夢を見ちゃって」

「ありや、大丈夫か?」

「うん、おにくちゃんが一緒に居てくれたからね」

「ありがとうございます、兄さん」

「うん、どういたしまして。というより、妹が頼ってくれたんだから応えただけだよ」

少し怒ったように話す須美ちゃんと、落ち着いている銀ちゃん。……やっぱり須美ちゃんはまだ、本当の意味で信頼できてないのかな。自然体の須美ちゃんならもっと冷静に行動できるだろうな。そんなことを考えていると、須美ちゃんがお礼を言ってきた。……確かにまだ信頼できていないのかもしれないけど、安堵の表情を浮かべる須美ちゃんを見ると杞憂に終わりそうだな。

不意に何処かからくう、という可愛らしい音が聞こえた。

「~~~~っ!」

俺も園子ちゃんも銀ちゃんも、音の聞こえた方を向く。そこには真っ赤になった須美ちゃんがいた。

「ははっ、もういい時間だね。朝ごはんを食べようか」

「さんせー!」

「私も〜!」

「……………」

三者三様の返答が返ってくる。銀ちゃんと園子ちゃんは元気よく、須美ちゃんはこくりと頷いて肯定の意を示した。

その後は部屋で何かを書いている安芸さんを呼んで朝食をとった。やっぱり料理は美味かった。頑張れば再現できそうだ。帰ったらやってみよう。

◇◇◇

俺が帰る準備を終え、荷物を持って外へ向かおうとすると銀ちゃん達と出会った。銀ちゃんにこれから何をするのか聞かれ、帰ることを伝えると、銀ちゃんが驚きを隠せない様子で声を上げる。

「えー! 兄ちゃんバス乗らないの!?!」

「うん、走って帰ろうかなって。重りはつけないけど」

「え〜、一緒に帰ろうよ〜。ほら、わっしーも一緒に良いって言ってるよ〜?」

「乃木さん! ……でも、一緒に帰りたいのは、本当です……」

「よし、バスに乗ろう。そうしよう」

園子ちゃんの純粹な甘えと須美ちゃんの上目遣い、最高すぎるな。俺は二人の言葉を聞き終えた後、0コンマ1秒に満たないほどの速さで一緒に帰ることを告げた。

「よっしゃー」

銀ちゃんは歓喜していた。

◇◇◇

小学生三人は先にバスへ乗ってもらい、俺と安芸さんは旅館の偉い人に挨拶をしに行った。まさか女将さんが合宿初日に会った女の子だったとは思ってもよらなかった。

挨拶はつつがなく終わり、旅館を出てバスに乗り込む。すると銀ちゃんが須美ちゃんにお叱りを受けていた。その理由は遅刻が多いこと、それは良くないなあ。ただ、銀ちゃんがそんなことを理由もなしにする訳がないよなあ。というか見るからに何かを隠してるよなあ。まあ銀ちゃんのことだから人助けしてるとかだと思うけど。

安芸さんがバスに乗り、席に座る。そしてバスは大橋市へと走り出す。さらば故郷、また会う日まで。ふと気がつく俺の両脇に軽い重みに乗っていた。須美ちゃんと銀ちゃんだった。そして俺の膝の上に座っていた園子ちゃんも、どうやら寝てしまったようだ。

「……やっぱり疲れちゃったか」

三人はすやすやと眠っている。俺はそれを見て微笑を浮かべていた。

……さて、どうしよう。俺も寝るかなあ。よし寝よう。そう決めた俺は直ぐに意識を手放した。

◇◇◇

目が覚めると、神樹館まであと数分といったところまで来ていた。三人は未だに眠っている。そしてそのまま神樹館へと到着した。俺は三人を抱えてバスを降りた。起きる気配は微塵もない。

「安芸さん、俺、三人を届けてそのまま帰ります」

「……分かったわ、頼むわね。それと、お疲れ様」

「はい、お疲れ様でした。それでは」

安芸さんと別れ、俺は歩きだす。

「えーと、ここから一番近いのは園子ちゃんの家だな。園子ちゃんの家に行つて、須美ちゃんの家に行つて、最後に銀ちゃんの家だな」

ルートを決め、歩いて行く。三人を無事に届け終えた俺は家に着いた。玄関を開け、家に入ると異様に静かなことに気がついた。父さんと母さんは出掛けているのかな。そう考えながらドアを開け、リビングへと入る。すると、

「おかえりー！」

大きな声で笑顔を浮かべながら二人が言ってくる。俺はそれを見て、笑みが浮かぶ。そして俺も大きな声で、

「ただいまー！」

と、そう言うのだった。

第十五話 楽しい日曜と三度目の襲来

合宿から数日、俺は三ノ輪家にお邪魔していた。理由は単純、銀ちゃんに誘われたからだ。そして今、俺は鉄男とゲームをしていた。全勝なう。

「にーちゃん強すぎだつてー!」

「まあ、ランキング一位だしね」

「え、一位?」

「そうだよ、ほら」

「うわ、ホントだ。すげー」

テレビに映るランキングを指して言うと、鉄男は純粹な感想を述べる。ランキングには1位：Y U U K Iと表記されている。俺のプレイヤーネームだ。ちなみに2位にはC. d e e pという俺の友人の名前がある。

「あ、ねーちゃん! 買い物はー!?」

「今行くー!」

「お、それじゃあ鉄男、しっかりと勉強しろよ?」

「はーい、にーちゃんも気をつけて」

「うん、行ってきます」

鉄男が思い出したように言うと、銀ちゃんから返答が返ってくる。

俺は鉄男に言葉を残して、玄関へ向かう。

「あら、勇太くん。もう帰り?」

「いえ、銀ちゃんと買い物へ行くんです」

「そうなのね、気をつけて」

「はい、行ってきます」

「兄ちゃんお待たせ! それじゃ、行ってきます! お母さん!」

「行こうか、銀ちゃん」

「了解!」

銀ちゃんのお母さんと少し言葉を交わしていると、すぐに銀ちゃんが来る。そして俺と銀ちゃんは家を出た。

「どうやら動くらしいわ。そのうち、後を追うわよ!」

「は〜い」

……須美ちゃんと園子ちゃんの小さい声が聞こえた。間違いなく尾行するつもりだろうなあ。

◇◇◇

案の定尾行されて数分、俺は銀ちゃんと一緒に人助けに励んでいた。

色々な人の道案内をしたり、自転車を起こしたり、飼い主を伴わずに走ってくる犬を捕獲したりなどして、ようやくシヨツピングセンターイネスに着いた。

イネスに着いてからも人助けは続く。迷子の女の子のお母さんを探したり、子供二人の喧嘩の仲裁をしたりした。

「あっ！」

……今まさに新たな事件が発生した。女の子が買い物袋を落としてしまったために果物が辺りに散らばってしまい、急いで拾おうとしている。銀ちゃんも拾い始めている。俺はポケットからビニール袋をサツと取り出し、かなり遠くまで転がっていつてしまった果物に狙いを定めて少しだけ走る。周りに人居ないからセーフっ！

「とりあえず全部拾えたかな？」

周りを見ても果物は落ちていない。俺はパンパンに詰まった袋を持って女の人のところへと向かう。するとそこには須美ちゃんと園子ちゃんも居て、女の人と談笑していた。

◇◇◇

それから少しして、フードコートで昼食を取ることになった。もちろんしつかりと奢った。兄貴ムーブを遂行することに成功！

「じゃあ、二人とも家の前から見てたつての!?!?うえ〜……なんか恥ずかしいなそれ……」

「恥ずかしくなんかないよ。偉いよ〜」

「いつも遅れる理由はこれだったのね」

「言ってくればいいのに〜」

「んー、それはなんか他の人のせいにしてるみたいで……、何があるうと遅れたのは自分の責任なわけだしさ」

え、偉。銀ちゃんめっちゃ偉いじゃん。は？ 可愛いだよ。今まで黙ってお好み焼き食べてたけどもう我慢ならん。俺は銀ちゃんを撫で始める。

「偉いよ、銀ちゃん。あ、お好み焼き食べる？」

「食べる！」

「はい、あーん」

「あーん……ん、美味っ！ 麺はもちもちで生地は柔らかくて……」

「お、モダン焼き気に入った？」

「気に入った気に入った！」

「それは良かった」

撫でられながらモダン焼きを頬張る銀ちゃん、可愛かったです。俺もモダン焼きを一口食べる。うん、やっぱり美味しい。粉物は美味しい正義。

「昔からそういう体質なの？」

「ついてないことが多いんだー。ビンゴとか当たったことないもん……」

園子ちゃんの問いに答える銀ちゃん。苦労してるなあ……。

「襲来かな？」

俺の眩きの直後に風鈴の音が鳴り響く。

「ほらな……日曜台無し……」

そして世界が光に包まれた。

◇◇◇

樹海の中に白菊と牡丹と薔薇の花弁が舞う。

「俺も変身しなきゃな」

スマホの画面中央のボタンをタップする。桜の花弁が俺の周りを渦を描くようにして吹き荒れる。右手を横薙ぎに振るうと、花弁たちが散り散りになり、俺は背部に桜が描かれた紺色の甚兵衛に身を包んでいた。

「来たわ……」

「ビジュアル系のルックスしてるなあ」

「まずは私が、これで様子を見る！」

ビジュアル系……ビジュアル系？ バーテックスはバンドマンだった……？ 銀ちゃん言葉について考えていると、須美ちゃんが弓を引く。

直後、激しい揺れが俺達を襲う。

「うわ、震度いくつくらいかな」

「なんだなんだ!?!?」

「あの敵のせい!?!?」

「く……!」

不味いな、須美ちゃんが焦ってる。とりあえずまずは落ち着かせないと。銀ちゃんと園子ちゃんが先に動いてくれたか。

「落ち着けてって須美」

「三ノ輪さん……」

「私たちと一緒に倒そう!」

「合宿の成果を出す、そうしろ!」

「二人とも……」

「落ち着いたみたいで何よりだね。銀ちゃんと園子ちゃんが居るし、俺だつて居るんだ。落ち着いていこう」

「兄さん……」

良い顔になったじゃん。落ち着きを取り戻して、余裕が出てきたかな。

……揺れが収まったつてことは、来るな。

「ハッ!」

バーテックスが足をミサイルのように射出する。それに回し蹴りを合わせて攻撃を弾く。

「よくし、敵に近づくよく!」

「了解!」

敵に向かって動き出した瞬間、バーテックスは高く飛び上がる。……マジかあ、だるいなあ。

そしてゆったりとした動作で足をこちらに向けて撃ち出してくる。

「……上から来るよ! 退避!」

須美ちゃんが弓を射て、攻撃を試みるも弓では届かない。

「……制空権を取られた!!?」

「降りてこいコラー!」

「何か……仕掛けてくる」

銀ちゃんの叫びに応じたのか、バーテックスは四つの足を合わせ、ドリルのようにして攻撃をしてきた。銀ちゃんが受け止めているけどそう長くは保たないだろう。不味いな、俺が少し動揺してる。落ち着け。

「げっ!??ぐううう! 根性ー!!?」

「ミノさん!」

「一分は持つ! 上の敵を!」

……よし、気合い入れろ、俺。

「銀ちゃん! 三十秒だけ耐えてくれ!」

「分かつ……た!」

「園子ちゃん、須美ちゃん、援護を頼むよ」

「分かったんよ!」

「……! はい!」

園子ちゃんは平気そうだけど、須美ちゃんはやっぱりアクシデントに弱いな。レスポンスが少し遅い。リーダーを園子ちゃんにしたのは英断かな。

「……それっ!」

俺は園子ちゃんの槍で作った階段を駆け上がる。そして、須美ちゃんが撃った矢で踏み切り、バーテックスの本体を弾き飛ばす為に回し蹴りを叩き込む。狙いは銀ちゃんを解放することで、狙い通り銀ちゃんを襲っていたドリルを退けることに成功した。

「もう一発、プレゼントだよっ!」

俺は回し蹴りを入れた後、勢いそのままに後ろ回し蹴りを繰り出す。バーテックスの一部分が抉れる。

「届けええ!」

そして須美ちゃんが、園子ちゃんの槍から飛んで矢を射る。バーテックスはさらに体勢を崩し、落ちていく。

「ここから……出ていけ!!?」

園子ちゃんが槍でバーテックスを穿つ。バーテックスの体には風穴が開いた。

「三倍にして返してやる！ 釣りは取っとけえええ!!?」

銀ちゃんの叫びと共に赤い光がもはや動くことすら出来なくなつたバーテックスを切り刻む。

そして鎮花の儀が始まり、樹海は光に包まれた。

◇◇◇

「痛てて……」

「ミノさん大丈夫?」

「疲れたよ……。腰にくる戦いだつた……」

「ああして攻撃を受け止めてくれたから私たちが攻め込めたんだよ。ありがとうね、ミノさん」

「そつちこそ凄かつたじゃん」

「だって、ミノさんが一分持つって言ったんだから、一分は持つじゃない? それにおにくちゃんの指示があつてのことだよ」

「あーあ……お腹すいた!」

「うどん食べてる途中だったもんね」

「ひぐつ……う……うう」

「ええええつ!?」

「ど、どうした須美!!?どこか痛いのか!?」

「違うの……私……、ごめんなさい……。次からは……はじめから息を合わせる……、頑張る……」

「ああ……、頑張ろうな!」

「はい、わっしー。ハンカチだよ」

「ありがとう……、そのつち……」

「……! もう一回言つて、わっしー!」

「そ……そのつち……」

「アタシは!??アタシは!??」

「銀……」

「えつ!??」

「くく銀っ!」

「！嬉しいな!!?なんかようやく須美とダチになれた気がする！」

「銀……。二人とも……。ありがとう。私も……。頑張るから」

「ああ！……。あれ、兄ちゃんがない!!?？」

「ホントだ。なんでだろ？」

「兄さん……。何処に……」

◇◇◇

「……。ここは何処だろう。景色的に丸亀市とかかな？……。なんで？」

「なんで丸亀市？ 本格的に謎だなあ。」

「まあ、考えてても埒があかないしなあ。帰るか」

「三人も待つてることだろうし。早く帰って、遅くなったランチタイムを楽しもうかな。」

第十六話 にちじょう、わいわい

「……つらあ！ ……そおい！」

「……えいつ！ やあつ！ ……ふつ！ たあつ！ ……はあああ
！」

「あああああ！ ふんつ！」

銀ちゃんと園子ちゃんの気合いの入った声と動き、合同訓練は初めて見たけど、思ってたより圧倒的に良いものだね。

何かが発火するような音が響く。音の発生源は須美ちゃんが撃つた的らしい。……矢が当たって爆発、なかなかすごい事な気がするなあ。

そんなことを考えていると水面を撃つて的を浮き上がらせた。そして間髪入れずに空中の的を撃ち抜く。

そこで砂時計の砂が落ちきった。

「そこまで！」

安芸さんが訓練の終わりを告げ、三人を集め、話し始める。

「勇者の力は、神樹様選ばれた無垢な少女でなければ使えない。……例外は一人だけいるけれど、貴女たちに頑張ってもらうしかないわ。そこで、次の任務は……」

銀ちゃんの唾を飲み込む音が聞こえ、安芸さんが告げたのは……

「しばらくの間、しっかり休むこと」

休暇をくれるということだった。

「「え？」」

三人は揃ってきよんとする。可愛い。

「安定した精神状態でなければ変身は出来ない。張り詰めっぱなしでは、最後まで保たないからね。……それに、この休みについては勇太くんが提案してくれたのよ」

優しい声で理由の説明をする安芸さん。そしてさらっと暴露する安芸さん。

「それは言わないお約束じゃないですか？ 安芸さん」

「ふふ、悪いわね。やっぱり伝えておくべきかと思って」

「そう言われちゃうと何も言えないですね……。それに、安芸さんだつて休みを入れるつもりだつたじゃないですか」

今回の休みのことは、確かに俺が言い出したことだ。この前の襲来の後、俺が丸亀からイネスへ戻ると、三人は今までよりも距離が縮まっていた。須美ちゃんの壁が無くなったのだろう。仲良きことは美しきかな、ということ、三人の仲をもっと深くするために休みを提案した。

……それに、三人はまだ小学生なんだ。少しでも御役目から離れて、普通の子らしく過ごして欲しかったのもあるな。

まあ、元から休みを入れるつもりだつたらしいが。流石安芸さん。優しい。

「ありがと！ 兄ちゃん！」

「ありがと〜！」

「ありがとうございます、兄さん」

三者三様の感謝を受け、俺は目を閉じて喜びを噛み締める。そして笑いながら、

「どういたしまして」

そう言うのだった。

◇◇◇

さて、俺は今、乃木家に居る。もう一度言おう、乃木家に居る。そして銀ちゃんが着せ替え人形となっていて、俺は銀ちゃんの着替えを待って、部屋の外に立っていた。

……いやあ、1着目はヤバかった。本当にヤバかった。俺は語彙力を失い、須美ちゃんは鼻血で血液をそこそこの量失った。

……なんで俺は一眼レフを持って来なかったんだ。過去の俺よ、カメラを常日頃から持ち歩け。そうでなければ大変なものを撮り損ねるぞ。

「いいよ、おにくちゃん」

「それじゃあ、失礼するよ」

入室したと同時に固まる俺、そんな俺を見て戸惑う銀ちゃん、鼻息荒く写真を撮りまくってる須美ちゃん、目をキラキラさせている園子

ちゃん。

「……これは、もはや金……!?」

「須美と同じこと言ってる!?」

どうやら心の声が漏れてしまったらしい。びっくり。そしてどうやら俺は須美ちゃんと同じことを、言ったらしい。これまたびっくり。

「ねえねえ、おにくちゃんはこのミノさんをどう思う?」

「可愛すぎる」

「うえええええ!?」

可愛すぎるだろ。は? 可愛すぎな? 服のことはあまり分からないけれど、それでも滅茶苦茶に似合ってた可愛いと言える。

薄いベージュのニーソックス、白と黒のレギンス、焦茶色のラインが一本入ったベージュのスカート、襟と袖が花みたいになっている大きめの白い服、その上から羽織っているカラフルな花の形の小さい飾りボタンと大きめな丸い飾りボタンがあしらわれて、襟、袖、裾が花みたいになっているダークブラウンのポンチョみたいな服。そして恥じらう銀ちゃん。

……なんか危ない気がした。多分開いてはいけない扉を開きかけた。

「それじゃあおにくちゃん、また待っててね」

「は〜い」

「兄ちゃんが園子みたいになった!?」

◇◇◇

「じゃじゃくん、ワンピースミノさん」

部屋に入っただけで俺の目に飛び込んで来た光による情報は、俺の脳をまた停止させた。裾から太もも辺りまでに規則正しく並んだ花のような柄が描かれた淡い緑色のワンピースを着た銀ちゃん。

大人っぽくて……イイ!

◇◇◇

「わあああああ」

「……これはこれで!」

「これは無しだろ!?？」

「アリアアリアアリアアリアアリアアリアアリア！」

……毎回固まっている気がする。今度の銀ちゃんの格好は、白と黒の縞々サイハイソックス、裾にフリルがあしらわれ、赤に黒いラインと白い模様が付けられたミニスカート、【Journey to Mars】火星への旅と英語で書かれ、星とロケット、ロケットに捕まる犬が描かれたトレーナー、十字のチャームのチョーカー、そして、赤の強めなピンク色のツインテール。

これもまた……イイっ！

「兄ちゃん！ 須美になんか言っておえ！」

銀ちゃんの頼みだ。ここは一つ、しっかりと、お話しなくては。

「須美ちゃん」

「はい、兄さん？」

「後で写真下さい」

「分かりました！」

「兄ちゃん!?!?」

……っ!?!?口が勝手に!?!?

「あく、おにゅちゃんもわっしーと同じタイプなんだね」

「可愛かったからしようがないよ」

「わあく、ミノさん照れてる」

「うるさい！」

◇◇◇

「むう……」

襖の奥からこちらを拗ねた表情で覗く銀ちゃん。……可愛い。

「良かったわ、銀！」

「何がだよ!!？」

「じゃ、次はわっしーの番ね」

「そう次は私のは……ん？」

「このお洋服とか、似合うと思うよ？」

「なっ、だ、ダメよ！ そんな非国民の格好！」

おっと、須美ちゃんのも見れそうだ。

「いやあ、似合うと思うなあ！」

銀ちゃんがここぞとばかりに復活して園子ちゃんの援護にまわる。

「ええーっ!??そんなあ!??」

あわあわ須美ちゃん、可愛い。

「それ、着せてやれー！」

銀ちゃんが須美ちゃんに向かって走り出す。俺は銀ちゃんとすれ違い、退室する。

「ぎやあああ!!」

「ほれほれ！」

どんな格好なんだろうなあ。楽しみだ。

第十七話 結城勇太はおもちやである（？）

「おおっ、いいじゃん須美！ アイドルだってなれるぞ！」

「私ファン1号になるよ〜！」

「兄ちゃん！ 須美のこの格好に感想プリーズ！」

「かわいい！」

「に、兄さん!？」

やべえって、須美ちゃんにピンクめつちや合うじゃん。首元のリボンもイイ！ ……顔が少し曇ってるのは気になったけど、鏡に映る自分を見つめるときめいていたから多分楽しめてるだろう。

須美ちゃんを見つめ満足げに頷いていると、須美ちゃんの号令がかかる。

「そのつち、銀？」

「もっちろん！」

「分かってるんよ〜！」

寒気が走る。これから恐ろしいことが起こると俺の感覚が騒ぐ。ま、まあ別に、予感が当たる訳じゃないんだから、大丈夫だろう。あー、怖かった。よし、脱出しようしよう。

「おに〜ちゃん？ 逃さないんよ〜」

「えっ」

園子ちゃんはそう言うと、満面の笑みで唯一の出口を塞ぐ。

「兄ちゃんも着替えるべきだよな！ ファッションショー開かないと！」

「えっえっ」

目を爛々と輝かせた銀ちゃんが手をわきわきと動かしながら距離を詰めてくる。

「ふふふふ、さあ、観念してくださいね。兄さん」

「ええ……」

須美ちゃんは黒い笑みを浮かべながらにじり寄ってくる。手には何やらたくさんの布がある。……十二単だアレ!? なんであるの!? てか重くないの!? 小学生には重いと思うんだけど!?

俺は多分どう足掻いても逃げられないことを悟り、諦め、そして覚悟を決めた。

「女装なのかあ……」

たった一つ、嘆きを残して。

◇◇◇

「こ、これは……やばいな、須美！」

「ええ、写真に収めなくちゃ！」

「想像以上に似合ってるんよ〜！」

アタシ達は兄ちゃんのフアツションショーを開いた。それもただのフアツションショーじゃなく、女装だ。アタシは普通の服でも良かったんだけど、須美と園子に従って良かった。半端なく似合ってる。最初に兄ちゃんに着せたのは兄ちゃんの高校の制服で、スカートの丈が短くって驚いた。

兄ちゃんは女顔みたいで、赤色の短い髪がボーイッシュな女の子っぽい。……アタシに近い感じの格好だ。兄ちゃんからしたら災難かもしれないけど、見てて悪い気はしないな。

「足を軽く開いて、少し内股気味で。それから右手を前に出してピースをして欲しいんよ〜」

「……はい」

園子の指示に従ってポーズを取る兄ちゃん。ビシツと決まったはずなのに何かしっくりこない。何が足りないんだろう。アタシはその違和感の正体に気がついたから、つい言ってしまった。

「兄ちゃん、笑顔笑顔！」

「……」

「良いわ！ これは逸材ね！」

「」

アタシの言葉を聞いた兄ちゃんは、鏡を一瞬見て自分の姿を確認し、その姿にバツチリと似合う無邪気な笑顔を浮かべた。それを見た須美は鼻血を出しながらシャッターを切りまくっていた。……今日だけで貧血になっちゃうんじゃないかと心配になった。園子は……、目をキラキラさせながらヘッドバン（顔）していた。

あれ、もしかして兄ちゃん意外と乗り気なのか、アタシは次の服を何にするか聞く。

「五衣唐衣裳がいいわ!」

「それなあに?」

「十二単のことよ、平安時代後期に成立した公家女子の正装なの」

「平安時代、紫納言さんのいた時代だっけ?」

「混ぜってるんよ。紫式部さんと清少納言さんだよ」

「あり、そうだっけ。てかさ、平安時代の格好ならアレじゃない? 髪

長い方がいいんじゃない?」

「銀、素晴らしい案よ! そのうち!」

「はくい、これで良い?」

「なんでカツラ持つてるんだよ……」

園子を取り出したのは、黒髪のめっちゃ長カツラだった。つーかどこから取り出したんだソレ……。そんなことを考えていると、

「あ、カツラもらうね」

「もう着終わってる!」

「アリアリアアリ!」

「こんなのどう?」

「アリアリアアリ!!!」

着替え終えた兄ちゃんは割とノリノリでカツラを被った。もう受け入れてる!?! いやいやいやいや、流石に兄ちゃんといえど女装を受け入れるの早すぎないか!?

アタシが混乱しているのを見た兄ちゃんが言った。

「銀ちゃん、受け入れた方が気が楽になるんだよ」

そう言った兄ちゃんの顔は多分一生忘れないと思う。だって、あんな全部を諦めた顔の兄ちゃんは初めて見たから。

その後も兄ちゃんは着せ替え人形になっていた。物語の中のお嬢様みたいな格好だったり、バニーガールだったり、色々な服を着せられていた。

兄ちゃんも混乱してたんだろう。めっちゃくちゃノリノリだった。



「知ってる天井だ……」

どうやら俺は疲れていたのだろう、いつのまにか寝ているとは。白い天井を見ながら今日あったことを思い出す。日記に書くために。

「今日は、銀ちゃんと須美ちゃんのファッションショーを見たんだよな。でも、それ以降の記憶は一切ない……」

「うーん、謎だな」

いくら考えても答えは出てこない。仕方ない、諦めるか。

ふと時計を見ると、もう深夜だった。今起きたばかりでもう一度眠るのは流石に無理だ。

「うん、風呂行く」

俺はベッドから起き上がり、重い身体に鞭打って風呂へと向かった。

浴場の鏡を見て、何故か内股気味になっていることに気づいたのは、また別のお話……

第十八話 夢と真実

「……なんで？」

部屋で寝ていたはずの俺は今、樹海にいた。さつきまで寝てたのに制服になつてるところから夢の中なのは分かるけれど、また銀地獄みたいな悪夢ちやんのあの夢か？

「……動ける」

だが、どうやらいつもの夢とは違って動けるらしい。つまり銀ちやんを助けることが出来る。そうと決まればスマホを手に取り……

「スマホがない!？」

変身出来ないのは不味いんじゃないか？ ……いや、今重要なのは銀ちやんたちがどこに居るのか、そして今無事なのかだ。

「探さなきゃー!」

俺は三人を探して走り出した。

◇◇◇

「どこにもいない……うー」

樹海中を走り回って探したが、三人の姿はどこにも見当たらない。いつも戦っている大橋、色とりどりの根の下、壁の上、色々な所を探したけれど見つけれなかった。

「考えられる可能性は……」

一つ目は、既に戦いが終わっていた可能性。恐らくこれはないだろう。もしもそうなのであれば血痕の一つや二つ見つけれられるはずだ。……見たくないけれど。

二つ目は、そもそもこの樹海に三人がいない可能性。どこを探しても見つからない、それはここに三人が存在しないからなんじゃないか。それに、例の悪夢だと思っていたけど、それを証明する根拠がない。

「どうしたものかなあ……」

あと探していない場所は神樹様の根本くらいか。よし、行ってみよう。それでダメならまた考えればいい。そう考え、俺はまた走り出した。

神樹様の根本に着いたけど、特に何も無いな。ぐるりと一周してみても何も見当たらない。三人の姿もないし、バーテックスもない。まあ、バーテックスがここに居たら不味いと思うけど。

「んー、よし。もう一回探しに行こう」
「待つてもらえるかな？」

伸びをして、もう一度三人を探しに行こうとした瞬間、後ろから声が聞こえた。それはここで聞こえる筈のない声、聞こえてはいけない声。そして、俺にとって聞き馴染みのある声によく似た声。

……まるで友奈の声だった。

なんでここに友奈が、そんな考えが一瞬頭をよぎる。でもよく考えようと、友奈の声より若干、ほんの少しだけ声が低い気がする。

「おーい、聞こえてるー?」

やっぱり友奈の声より低いな、ああ、友奈の音が聞きたくなってきた。それにしてもまずいぞこれは本っ当にまずい。友奈ロスが半端ない。会いたいなあ、もう二年以上会ってないんだもん。久しぶりに会ったら何をしようかな、まずは銀ちゃん達を紹介するか。いや、その前にめっちゃ謝ろう。そうしよう。

「きーこーえーてーまーすーかー!? (爆音)」

「耳がつ!」

「一回で返事しないからだよ」

「ごめんなさい」

右耳から聞こえる思考を止めさせる大音量の言葉。すっごく耳痛いし頭がぐわんぐわんするが、そうだった理由は俺が悪いことに間違いないので振り返り謝る。そこには、友奈のような柔らかく暖かな雰囲気を感じた友奈のそっくりさんが居た。

「別にあんまり気にしてないからいいよ」

「ありがとう。それで、君は?」

「私はユウナ。まあ色々あって今は神樹と一緒に居るんだ」

そう言うと、ユウナと名乗った少女は笑顔を作る。……本当に友奈そっくりだ。多分見分けられる人は限られるだろうな。もちろん俺は余裕。

さて、切り替えていこう。情報を手に入れないことには何も考えられない。

「うん、分かった。ユウナちゃん……いくつか質問してもいいかな？」

「答えられる範囲でなら答えるよ」

「まず一つ目、この場所に俺以外の勇者は居る？」

「いいや、君だけしか居ないよ」

「……そっか。なら二つ目、君は結城友奈と関係がある？」

「あるね」

「どういう関係があるのかな？」

「すつごく長くなるから今は答えられないかな。でも、いつか必ず教えるよ」

「……三つ目、君は何者？」

「君たちで言うところのヒミコかな。すつごく昔の偉かった人なんだよ？」

「……ヒミコ？」

「ふーん、なるほど。間違いなく隠されちゃってるね」

「ここまでのユウナちゃんへの質問から考えると、まずこの場所には俺とユウナちゃんだけしかない。つまりあの夢じゃないことが確定した。そうなってくるとユウナちゃんの正体が気になるな。ヒミコ……、漢字を当てるなら日の巫女さんで日巫女とかかな……？ 隠されたっていうのはどういうことだろう。」

それに、友奈にそっくりな理由も気になる。今は教えてもらえないらしいからこれは一旦置いておこう。

「天と地、神と人。それぞれは決して相容れることはなかった。でも今はどうだい？ 人々は神樹と共に生きている。君たち勇者なんて特に顕著じゃない？」

「……？ まあ確かにそうだね」

「さて結城勇太くん、バーテックスは何処からやってくる？」

「壁の外からだよね」

「正解。なら、バーテックスの正体は？」

「未知のウイルスから生まれた敵性存在って聞いているよ」

ユウナちゃんの言葉、一つ目は何を言っているのかあまり分からなかった。二つ目は勇者の常識だからすぐに答えられた。三つ目も同じ。そう思っただけで、ユウナちゃんは首を横に振る。

「君は知ってるでしょ？ 隠蔽、改竄が大好きな組織を」

「……まさか、バーテックスはウイルスから生まれた訳じゃない？」

「そのままだよ、少し時期尚早かも知れないけど、君は知っておくべきだと思う。こっち来て」

ユウナちゃんはそう言うと、指を鳴らす。すると神樹様の根元に居た筈なのにいつも戦っている大橋に移動していた。そしてユウナちゃんは歩き出す。

「この先には何がある？ 神樹の作った壁があるよね。その先には何がある？」

「……ウイルスで滅びた日本がある」

「そういう風に教わったんだね。でも、それはとある組織の流したデマなんだよ。ほら、確かめてみると良いよ。君が、君たちが見ていた世界の本当の姿を」

ユウナちゃんがまた指を鳴らす。今度は壁の上に立っていた。俺は壁の外に出て、信じられない光景を目の当たりにした。

「嘘、だろ……」

「残念ながら本当だよ」

嘘だと言っただけだった。けれどユウナちゃんは本当だと告げる。壁の外は真っ赤な炎に覆い尽くされ、かつての日本の姿なんて何処にも見えなかった。

突然俺の身体が光り始める。きつとこの樹海から追い出されるのだろう。なんとなく、そんな予感がした。

「はあ……時間かあ。結城勇太くん、今日のところはこの辺りでお開きだよ」

「……うん、分かった。次に会う時までには聞きたいことを考えるとするよ。ありがとう、またね。ユウナちゃん」

俺はそう言って、意識を手放した。



「思ってた以上に強いね。彼は」

私は彼の勇者のいなくなった樹海で言葉を紡ぐ。

「流石は、私の因子を全部継承した勇者だね」

誰に聞かせる訳でもなく、ただ話し続ける。

「次に会うのはいつになるんだろう」

私は待ち続ける。彼の力があれば、きつと……。

「……それじゃあ私も寝るとするかな。おやすみ、神樹。おやすみ、勇太くん」

神樹の中に戻り、眠気が私を襲う。睡魔に身を委ねようと思った時、ふと思い出した。

「……今日の出来事、覚えていてほしいな」

今度こそ睡魔に身を委ね、ゆつくりと意識を失っていった。

第十九話 結城勇太はやらかした

物凄く大切な夢を見た気がする。目が覚め、強くそう思った。思考がクリアになっていく。それと同時に、自分の中で整理をしなければ何も手に付かなくなりそうだと思った。

「早くノートにまとめないと」

書く内容は、「壁の外の真実」日本のかつての姿はもうない可能性があるということ。

それから、「バーテックスの出所」ウイルスから生まれた敵ではないのかもしれないということ。

そして、「俺達の前の勇者」300年前に神樹様が壁を作った。そこから今に至るまでバーテックスが来なかったのはどうしてか。三つ目は今突然思いついたものだけど、きつと重要なことだと思って書くことにした。

「ふう、とりあえず今はこんなところかな。……寝れるかなあ?」

ぼやきながら、重要なことを書き込んだノートをリュックの中に入れた直後、猛烈な睡魔に襲われる。寝れるかどうかは心配する必要はなかったらしい。

俺はそのまま、机に突っ伏してまた眠りについた。

◇◇◇

「……やばいな。今何時だろう」

目が覚め、一番に感じたのはやらかしたという感覚だった。

身体は痛いし、外に目を向けると、空は青く晴れ渡り太陽が高く昇っていて、恐る恐る時計を見ると針は無情にも十二時を指し示していた。

「うーん、もうすぐ四限目が終わるなあ。よし、めっちゃ急ごう」

父さんと母さんはもう家におらず、いるのは俺一人だった。時間見れば分かることだけどね! ……それは置いておいて、とりあえず洗顔と歯磨きを手早く済ませ、制服を身に纏う。教科書などの入ったリュックを背負い、家を出る。カードキーで施錠をし、学校へ向かって走り出す。

「急げ急げ……！ ええ……嘘でしょ……」

走り出してすぐに、信号に引つかかる。幸先が悪いなあ。えつと確か、この信号は一分ごとに赤と青が切り替わった筈。そして俺が止まったときには既に赤だった。つまりは、もう青になるってこと！

「やっぱり、予想通り」

青信号の音が響くなか、俺は再び走り出す。走って少し暑くなったからブレザーのボタンを外す。ネクタイがパタパタと風に靡く。学校に着いたら春信と何を話そう、そう考えながらアスファルトを強く蹴った。



「あれれ〜？ あそこで走ってるのっておにくちゃんじゃない？」

私と銀とそのつちでイネスへと向かっている道中、そのつちがそんなことを言い出した。そんな偶然がある訳ないと思った私はそのつちに言葉を返す。

「何言ってるのそのつち、兄さんがいる訳……」

すると、銀までもが言う。

「須美、ガチだぞ。アタシにも見えるもん」

「ていうか、こつちに向かつて来てるよね〜」

こつちに向かつて来てる？

「あれ？ なんで兄ちゃん制服なんだ？」

制服を着用してる?? 私は困惑しながらも、なんとか言葉を紡ぐことができた。

「……本当ね、今日は土曜日だっていうのに」

「とりあえず聞いてみれば分かるだろ！ おーい！ 兄ちゃん！」

銀が大きな声で呼ぶと、兄さんは驚いた顔をして、そのままのペーすで私達のところまで走って来た。

「三人とも何してるの!?! 学校は!?!」

「あはは、今日は土曜日だから休みだよ〜」

「ドヨウビ?」

「ふふ、あはは」

真剣な顔からきよんとした顔にころりと変わったのを見て、私は

笑ってしまった。兄さんは少し恥ずかしそうに頬を掻いて、
「アレ？」

と、言葉を漏らした。

◇◇◇

「恥ずかしい……」

イネスのフードコートで、両手で顔を覆い、耳まで真っ赤にして恥ずかしがる兄さんを見て、私は今まで経験したことのない胸の高鳴りを感じていた。

「兄ちゃん、寝坊したから急いで学校に行こうとしてたんだね……」

「そして、今日は休みだった、と」

「うう……だから歩いてる人がこっちを見てた訳だ……」

凄く可愛い。いつも強くて頼りになる兄さんが恥ずかしそうにしてこちらを恨めしそうに見ている。その顔がこの前のおめかしした銀の顔と似ていて、また笑ってしまった。銀やそのっちはニヤニヤしながら兄さんを見ている。二人と兄さんの視線が合うと兄さんは、

「はううう……」

という声を漏らして机に伏していた。

「……須美？」

どうやら私は兄さんの頭を撫でていたらしい。それも無意識のうちに。銀に呼びかけられてはっとしたが、それでも私の手が止まることはなかった。兄さんも止めることはなかった。

そして、銀も兄さんを撫でた。銀の顔を見ると、何かに戸惑っているような表情を浮かべていて、それはきつと、さつき私の感じていた胸の高鳴りと同じなんだろうとなんとなく理解できた。

そのっちを見ると、ぽーっとした様子で私たちを見ていて、

「ほら、そのっちも」

私がそう言うと、恐る恐るといった様子で兄さんを撫で始めた。でも少しもしないうちに慣れたのか、微笑みながら兄さんを撫でていた。ふと、兄さんの顔を見ると、ふにやりとした笑みを浮かべていた。私たちはさらに強くなっていく胸の高鳴りを抑えようともせず、フードコートの呼び出しの機械が音を立てるまで、兄さんをずっと撫

で続けていた。

第二十話 国を守る者達

「国を護れと人が呼ぶ……」

紺色の軍服に身を包んだ少女が呟くように謂う。

「愛を護れと叫んでる〜!」

カーキ色の軍服に身を包んだ少女が叫ぶ。

「憂国の戦士、国防仮面ツ〜!」

真紅の軍服に身を包んだ少女が笑みを浮かべながら云う。

「「見参!!」」

三人が声を揃えてポーズを決める。

……さて、妹たちが護国思想に染まりました。どうすれば良いですか？

「へへ、兄ちゃんどうだった?!」

「すごく驚いたよ」

「大成功だね〜」

「完璧だったわ! そのうち! 銀!」

「えっと、この国防仮面を一年生とのレクでやるの?」

「そうだよ〜」

すごくカッコよかったし、一年生へのウケも良いと思うんだけど……うーん、なんだろう、不安。安芸さんに怒られないかなあ……?

……まあ、楽しそうだし良いか! それに、そこまでは怒られないでしょ。昔、家庭科準備室を勝手に使ってたけど怒られなかったし!

……バレてた筈なのになんで怒られなかったんだろう?

「というわけで、兄さんにも国防仮面になってもらいます!」

「えっ?」

須美ちゃんという言葉に困惑する。その衣装自作だよな? なんて俺のあるの? そんなことを言おうとすると、銀ちゃんと園子ちゃんに両腕を掴まれて隣の部屋へと連れ込まれた。ちなみに二人は俺をこの部屋に置いて須美ちゃんがいる部屋に戻っていった。

「完成度高いなあ……。よくここまで作り込んだね」

俺の前にあつた衣装は、白地に桜の刺繍があしらわれた軍服と、淡いピンク色の軍帽、目を隠す赤い仮面、軍帽と同じ色のマント、そして日本刀（模造刀）の五つだった。

「刺繍細かいな……器用すぎない？」

さらつと袖を通す。なんでだろう、園子ちゃんの家で着替えると言いやうのない不安に襲われる。背筋に冷たいものが走る。……考えない方が良さそうだな。うん、そうしよう。

「……んしょ、こんな感じかな？」

マントをつけ、軍帽を被る。鏡を見てみると、そこには国防仮面がいた。

「自分で言うのも何だけど、似合いすぎじゃない……？」

腰に刀を差すと、どうやらスイッチが入ったらしい。須美ちゃんたちが言っていた名乗り口上を思い浮かべる。

そして襖を勢いよく開き、ノリノリでその口上を述べる。

「国を護れと人が呼ぶ……」

軍帽の鰐を持ち深く被った状態で、目を閉じて立つ。足は肩幅に開き、鰐を持っていない左手を腰の後ろに。

「愛を守れと叫んでるッ！」

ポーズは変えず、力強く叫ぶ。

「憂国の戦士、国防仮面」

ゆつたりとした動作で腰の刀を持つ。

「見……参ッ……！」

スラリと刀を抜き、切り払うように振る。

「流石おにくちゃん、予想を遥かに超えてきたんよ〜！」

「これが大和男子……！」

「スゲー！ 御免ライダーみたい！」

なかなか良いな、この格好。純粹にカッコいいし、うん、気に入った。なんでサイズがピッタリなのかはちよつと気になったけど、まあ良いか。三人とも気に入ってくれたみたいだし。

「最高なんよ〜！ 夢で見た姿そのもので、完璧なんよ〜！」

「兄さん！ これから私と共に国防に励みましょう！」

須美ちゃんと園子ちゃんの熱量がすごいなあ。火傷しそうなくらい熱々だよ。銀ちゃんは落ち着いてる……ように見えたけど違う！なんかプルプルしてる！ あっ、目が、須美ちゃんたちに引けを取らないくらい輝いてる！ 椎茸の飾り切りみたいなのが見えるなあ。……なんだろう、喜んでもらえるのは凄く嬉しいんだけど、やっぱりなんだか背筋が凍るんだよなあ。

くう、と可愛らしい音が鳴った。

「あ、そろそろ昼時だね」

「あら、銀。可愛い音ね？」

「ミノさんかわいく」

「やめてよお……」

にやにやと悪い笑みを浮かべる須美ちゃんに園子ちゃん。銀ちゃんは手で顔を覆っていた。耳まで真っ赤にして手で顔を覆ってるの可愛すぎるんだけど。くっ……撫でたい衝動に駆られる……！

「お昼ご飯どうしよつか？」

「そうね……特に考えてなかったわね……」

「うう……イネス行く……？」

「イネスはちよつと遠いんよ……」

「それじゃあ、軽くうどんでも作ろうか」

三人がピシッと固まる。え、そんな驚く？こんなこともあろうかと、材料を色々買ってからここに来たんだ。……まあ、主に買ってきたものはトッピングなんだけどね。

「えっ、兄ちゃん料理出来るの!？」

「凄く上手いってわけじゃないけど、それなりには出来るよ。それじゃ、ちよつと待っててね。キッチン借りるよ」

「は、は〜い!」

「その前に着替えなきゃダメだな」

俺はさっきの部屋に戻り、国防仮面から高嶋勇太へと戻った。

◇◇◇

やって来ました、キッチン。そして背後に感じる三つの気配。うん、みんないるねえ。

「さて……一緒に作る？」

「うえっ!? バレてる!？」

「だ、大丈夫よ銀! ここで息を潜めていれb……」

「いいの〜!？」

「そのつちー!？」

「須美もだいぶデカい声出してるとじゃんか……。もうバレバレだし、アタシも参加しよーっと」

「銀まで!? うううう……。私もやりますっ!」

「うん、それじゃあみんなで作ろうか」

「二はーい!」

みんなで作ったうどんはとても美味しく、三人の笑顔はとても眩しくて、今日のことは絶対に忘れないと心に誓った。

……こんな平和な日を、早く当たり前にしてあげたいな。バーテックスを倒して、この子たちを絶対に守ってみせる。それは俺にしか出来ないことだから。

ちなみに、国防仮面は安芸さんにしこたま怒られたらしい。……うーん、やっぱりダメだったかあ。